福島における分断修復学の創成

― トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に[1] ―

成　元　哲
牛　島　佳　代

人生は、ふり返ることでのみ理解されうるが、
前を向いて生きられるべきものだ。
セーレン・キェルケゴール

1．福島県中通り地域における分断修復の試み：長期追跡調査による実態解明を踏まえた介入研究

本研究では、有害物質によって大規模かつ長期的に環境汚染が疑われる地域では、自然環境の破壊のみならず、人と人を結びつける基本的信頼やつながりが傷つけられ、「トラウマを抱えたコミュニティ」が出現することを明らかにする。避難区域外の「自主避難区域」とされた福島県中通りでは、長期にわたって除染が続けられる一方、低線量被ばくをめぐって家族、地域社会、友人・知人との間に、認識のずれや対人関係がこじれ、コミュニティ内に生きているという感覚が毀損された状態を経験している。

1　本稿は、科学研究費助成事業（19H00614、15H01971）、トヨタ財団研究助成プログラム（D18-R-0325）の研究成果である。本稿は「トラウマを抱えたコミュニティ：集合的トラウマの社会学」（『中京大学現代社会学部紀要』第 16 巻第 1 号所収）と重なる部分があることを断っておきたい。なお、本稿の執筆過程において栗本知子さんはじめ多くの方々にご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

そこで、本研究は人と人とをつなぐ社会関係への介入を目的とした分断修復学を創成する試みを行った。その結果、有害物質による環境汚染が発生した災害においては、個人を焦点化した「心のケア」だけでなく、人と人をつなぐ「関係性のケア」が長期にわたって必要不可欠であることを主張したい。

これまでトラウマ概念は、主体の脆さと結び付けられた個人の心の病として受け止められてきた。しかし、私たちは人の精神健康上の問題は対人関係と密接な関係があるという考えに基づき（Markowitz 2017、水島 2015）、介入すべきは身近な人との対人関係、とりわけ、コミュニケーション関係にあり、「関係性が現実をつくり、現実はいつも対話から生まれる」と考えている（Gergen 2009 = 2020）。また、これまでトラウマ曝露は、過去の終了した単一の出来事または一連のエピソードが現在の心身への影響として現れるものと考えられてきた。だが、原発災害におけるストレスの特質を考えるとき、現在及び将来の危険といった現在進行形の脅威、あるいは、持続的なトラウマの影響がより重要である。そして、有害物質によって広い範囲で長期的に汚染が疑われる地域は、人と人との間の社会関係資本が失われ、トラウマを抱えたコミュニティが出現する。このようなコミュニティでは、社会関係資本が低下したことにより、補償をめぐる不公平感、情報をめぐる不安・不信、差別不安といった関係性の障害が発生しやすい（Aldrich 2019 = 2021）。

これまで追跡調査を進める上で、調査参加者と調査実施者との間で一定の信頼関係を構築し、その信頼関係に基づいた介入研究を多様な切り口で行ってきた。調査結果を分析し、その成果物をその都度、郵送する作業は、信頼関係の構築のためでもあったが、調査参加者に自らの体験を相対化し、再構成する材料を提供する試みでもあった。調査参加者の声を受けて開発した２つのツールによって、原発事故という出来事とそれに続く困難な時期をどのように乗り越えてきたのかについて記録しふりかえる試みについては、調査参加者の約２割の参加を得た。調査参加者の子ども達は近

い将来、進学や就職等で福島県外の人々との交流が増えることが予想される。福島原発事故を経験していない人との交流は、同時にコミュニケーションの障害や差別を誘発する可能性を高めるきっかけにもなり得る。ガブリエル・ガルシア・マルケスは「人生は出来事ではない。なにかが、なんらかの形で記憶されたものとして存在する」という（岩本 2020:41）。これらの記録をもとに、原発事故当時の記憶を伝えることによって、子どもたちの自己アイデンティティ形成に資することが期待される。

本研究は、福島の現状に対する実態把握に基づき、多様な関係者が宥和せずとも共存できる相互了解を可能にする知的枠組みと関係者間の取り組みを分断修復学として創成するのが目標である。それに向けて、これまで大きく次の三つの取り組みをすすめてきた。

第 1 に、2013 年から毎年実施してきた社会疫学調査を引き続き行うことにより、原発事故による被害の実態解明に取り組んだ。第 2 に、この調査から得られたデータをもとに、原発事故後の困難な時期をどのように乗り越えてきたのかをふりかえり、親子が語り合い、周囲と交流するツールとして「親子をつなぐサポートブック」と「ふり返り手帳」を開発し、希望する調査参加者に配布した。第 3 に、当事者による「語り合いの場ふくしま」の活動、放射能をめぐる相互の認識のずれや対処行動の違いに気づき、背景を知るための対話の場づくりを通じて家族や地域における共同性の修復に向けた試みをすすめた。

原発事故の実態解明のための社会疫学調査は、「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」（以下「本調査」）である。この調査は、福島県中通り 9 市町村に住民票をおいた 2008 年度出生児とその保護者（母親）を対象に、2013 年から毎年 1 月に、それぞれ、およそ 15 頁もあるアンケート調査を、郵送で実施したものである。2021 年までの 9 回の長期追跡調査により、原発事故後の生活変化と健康影響に関する実態解明を行った。

この調査の第 1 回（2013 年 1 月実施）調査票の最後のページに、「今後、調査結果を生かして、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子

育てに関する不安を自由に語り合う場を作りたい」と自由記述欄を設けた。しかし、この提案に対して、回答者である一人の母親は、「この先も大丈夫と思っているママと、不安をかかえながらしょうがなく住んでいるママと移住計画中のママが語り合うなんて戦争」と書き込んだ。その時から、私たちの研究目的に、原発事故後の生活状況と健康状態に関する「実態把握」だけでなく、それに加えて「分断修復」が加わった。

ここにおける分断とは、あえて問題に触れようとしない空気感のようなものである。したがって、分断修復とは沈黙や対話の断絶・不在状態からの離脱を意味する。これまで10年余の間、原発事故後の生活と健康に関する実態把握のための調査だけでなく、この調査とセットで、調査票に書き込まれた膨大な数の声をまとめてフィードバックする。また定期的に行ったインタビュー調査では原発事故後の家族の経験に耳を傾ける。さらに2019年からの「ふり返り手帳」はそれまでの調査結果を調査参加者全体の中で位置づけ、自分の立ち位置と変化を相対化する機会を作る。2020年からの「語り合いの場ふくしま」というワークショップでは、調査者が仲介し、調査参加者同士の語り合いの場を設ける。こうした一連の活動を通じて、福島県中通りにおける分断修復の試みを、試行錯誤と手探りで実行し続けてきたわけである。

ルーマンは『リスクの社会学』の結末[2]で、さまざまな観察者が、宥和はしなくても、少なくとも共存できるような相互了解の形態を保っていくことを求めている。リスクの問題に関係づけていえば、決定者と決定に加わらない当事者は違うものを見ているのだけれど、少なくとも、自分たちが違うものを見ているのだということを学びとることによって、それぞれの観察を互いに観察するための道を開けるべきであろう。そうすれば、差異は、橋渡しはされなくても、処理できるようになるかもしれないのであ

2 「それゆえ、関与者が互いに他方の観察世界を再構成しあうことができるかどうか、あるいはどの程度まで再構成できるのかとは独立に機能できる了解の方法を、以上のことと並んでまた以上のことと明確に区別されたかたちで、吟味してみるのが賢明なのではないだろうか（Luhmann 1991=2014:260）。

る。ルーマンが早くからコンセンサスという形での相互了解の夢に対して距離を保ってきた理由はこのためである（Kneer, Georg and Nassehi, Armin, 1993=1995:209）。

これまでの取り組みの考え方とその概要を以下に示しておきたい。まず、調査票の自由回答欄に寄せられた福島の母たちの声の変化から概観しておこう。2013 年の第 1 回調査から 2020 年の第 8 回調査まで、自由回答欄の内容を項目別に分類し、分析したところ、福島で子育てをしている母親（保護者、以下同様）の声のうち一貫して多いのは、子どもの健康に関する不安である（図 1）。原発事故による子どもの身体的な健康影響、精神的な影響に加えて、外遊びをさせられなかったことによる成長・発達の遅れを不安に思う声が多い。原発事故から 2 年後の 2013 年に多く見られた「外遊び」と「避難」に関する声は、時の経過とともに減少し、2016 年には「除染」と「風化」が増加している。2020 年の第 8 回調査では「風化」が最も多いという結果となった。

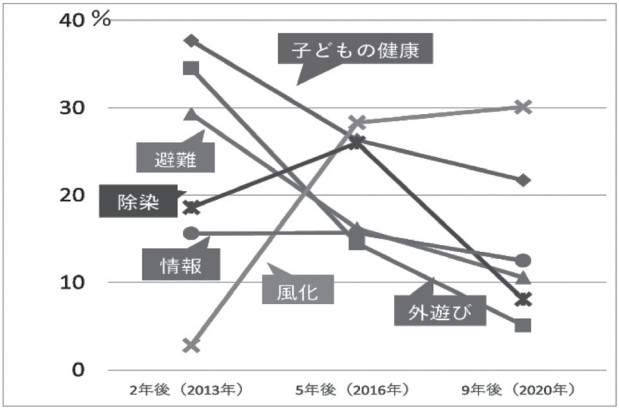


図 1　声の変化

2.「心のケア」から「関係性のケア」へ

> 10年前は、現在の様なおだやかな暮らしは想像できませんでした。お陰様で放射能の影響なく毎日を過ごしています。ただ、現在でも自主避難をされ、福島を離れてしまった方も多くいて、地元に残る人、避難する人を分断する悲しい事故だったなと思う。[3]

ここでは、原発事故が引き起こした家族や地域といったコミュニティと人間関係への影響を米国の社会学者カイ・エリクソン（Kai Erikson）の集合的トラウマ（collective trauma）[4]という概念から検討する。

災害や事故といった予期しない出来事がコミュニティのメンバーを結びつける絆を傷つける現象を、エリクソンは集合的トラウマ（Erikson 1976a = 2021）と呼んだ。集合的トラウマは、我々の社会生活の基礎をつくっている家族、地域、友人・知人のネットワークといったコミュニティの基本的構造に打撃を与え、それによって腐食性のコミュニティ（corrosive community）が出現する。腐食性のコミュニティとは傷ついた個人の集合体ではなく、人と人とを結びつける関係性に亀裂が生じているために現れるコミュニティの状態である。

原発事故は人々の心身の健康を脅かすだけでなく、コミュニティの関係性や長年にわたって培われ繰り返されてきた文化や生活のルーチンも破壊する。原発事故によって社会的なつながりが失われたことで、被害のあった地域に住む人々は、直接傷を負っていないはずの人もまた傷を負っているのであり、人間関係の網の目の中で生きているという感覚、コミュニティと共に生きてきた自分自身のアイデンティティの一部も同時に失うのであ

3　2021年1月、「福島子ども健康プロジェクト」が実施した「第9回福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」の自由回答

4　Erikson, Kai T., 1976, *Everything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*= 宮前良平・大門大朗・高原耕平訳 ,2021『そこにすべてがあった：バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』夕書房

る[5]。

「福島子ども健康プロジェクト[6]」は、2013年から毎年1月、福島県中通り9市町村に在住する2008年度出生児とその母親（保護者）を対象に、原発事故が子どもと家族、地域生活に与える影響を継続的に「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」を実施してきた。2013年1月の第1回調査では、健康影響への不安や地元産食材を使用することの不安が、回答者の母親（保護者）の9割を、避難願望も8割を、それぞれ超えていた。原発事故から時間が経ち、子どもたちが成長するにつれ、不安は減少していく一方で、「原発事故の補償をめぐる不公平感」、「放射能の情報に関する不安」、「いじめや差別への不安」は依然、高い水準のままである。不安や不公平感は、それを抱く本人以外にとっては微細なことで大して重要なものでもないかもしれないが、家族や近隣地域での人間関係を傷つけ、分断を生んでいることが分かった（成ほか 2015）。

トラウマは共同体の組織を傷つける。トラウマによって、私たちの身体や心を構成する組織が傷つけられるのと同じように、共同体を形成する有機的組織も傷つけられるである。そのようなことが起こらない場合でも、トラウマにより個人が受けた傷は寄り集まって一つの雰囲気、ほとんど集団の文化と呼べる一つのエートス（集合的心性）を作り上げることがある。新型コロナウイルスが蔓延するなかに行った2021年の第9回調査では、原発事故当時の集合的トラウマの記憶がよみがえったと語る母親も多く、人々の間に深い傷を残していることも分かった（成ほか 2021）。

トラウマは、混乱した感情や行動を引き起こすことのある出来事と、それによって引き起こされた反応や状態を指す言葉だが、トラウマ体験の中核は何だろうか。それは、無力化（disempowerment）と、人とのつなが

5　共同体あるいは集団がトラウマを抱えるという「集団のトラウマ」を発見したのは、実はフロイトである。彼は『モーセと一神教』の中で、個人の心の症状としての「心的外傷」を、集団の記憶に対して初めて用いた。

6 「福島子ども健康プロジェクト」のホームページ参照（https://fukushima-child-health.jimdofree.com/）

りを絶つことであるとハーマンは言う。だからこそ、回復の基礎はエンパワメントと、人との新しい結びつきを創ることにある。回復は人間関係の網の目を背景にしてはじめて起こり、孤立状態においては起こらない（Herman 1992=1999:205）。また、ハーマンは次のようにも語っている。

> 心的外傷体験（トラウマ）に遭遇した人は、基本的な人間関係に疑念を抱くようになる。トラウマは、家族、友情、愛情、コミュニティーといった人間の結びつきを破壊する。人間の生活に意味を与えてきた信頼関係がだいなしにされてしまうと、人の自己（セルフ）は破綻してしまう。自己とは、他者との関係の中ではぐくまれ保たれて成立しているものだからである。トラウマが人間関係を必ず損なうものであるということは、言い換えると、トラウマを受けた人の転帰は、彼らを取り巻く人々の態度によって大きく左右されるということである。周囲の人々が支持的に接してくれるならば、トラウマによる傷つきは大いに癒されるであろうし、逆に敵意に満ちた言辞や無関心が向けられるようだと、それがまた新たな傷つきを生んでしまう。トラウマのストーリーを共感的に傾聴してくれる者を得たとき、トラウマに遭遇した時点で失われた社会とのつながりや社会的意味の感覚は回復するのである。（ハーマン 1999：134）

ハーマンが言わんとすることは、人が傷つくこともまた傷から回復することも、基本的には他者との関係、人間関係を基礎にして行われるということである。当然ながら、心のケアというものは、個人の心の中だけで完結するものでなく、周囲の人々の態度や信頼関係によって大きく左右されるということである。

しかし、長年、トラウマからの回復を支える様々なアプローチが考案されてきたが、そのほとんどが、「個人のトラウマ」に焦点を当てたものであった。近年、ようやくオーストラリア赤十字社などが『集合的トラウマを引

き起こすイベントに対処するガイドライン』[7] を発表するなど、傷ついた個人の集合では説明しきれないトラウマ、集合的トラウマへの理解が広がりつつある（Saul 2013, Thierry 2021）。

改めて言うまでもなく、福島の原発事故は自然環境への脅威だけでない。それは自然と人間の間を引き裂き、人と人との間をも分断する。そして、コミュニティにおける長年にわたって繰り返されてきた生活のルーチンを破壊し、トラウマを抱えたコミュニティを出現させるのである。

今から約 50 年前の 1972 年 2 月 26 日、大雨で鉱山ゴミのダムが決壊し、アメリカ・ウエストヴァージニア州の炭鉱町バッファロー・クリークは、黒い水にのみこまれた。死者 125 人、住民の 8 割が家を失った未曾有の人災はコミュニティの崩壊をもたらし、生存者たちの心に深いトラウマを残した。エリクソンは被災者の訴訟のための初動調査をする社会学者として、そこで何が起きたのかを追求した。被災者への膨大なインタビューと綿密なフィールドワークを経て、エリクソンは被災者たちの心に深く刻まれた傷を次のように指摘した。

> 私たちの得た情報を総動員して言えるのは、バッファロー・クリークの人々が受けた傷がすぐに癒えることはないということである。かれらは金銭的には失った財産への補償を、象徴的には精神的な傷への補償を得た。しかし、かれらは失った共同性の基盤が補償されることはなかった。それはすなわちかれらが未だに居心地の悪い居場所で立ち往生し、宙づり状態にあるということである。（Erikson 1976a=2021:302）

50 年前のアメリカの災害被災者たちが経験した失われた共同性を捉え

7　ガイドラインは Brady,K, Randrianarisoa,A. and Richardson,J., 2018 を参照。この文献レビューは “Review of the Literature on Best Practices Before, During and After Collective Trauma Events” を参照。

るためにエリクソンは集合的トラウマという言葉を編み出した。1980年のアメリカ精神医学会による精神障害の診断と統計マニュアル（DSM-Ⅲ）よりも遡ること4年、1976年のアメリカ精神医学雑誌論文[8]とEverything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Floodという著書で、エリクソンはバッファロー・クリークの災害の被災者が経験したトラウマは、双方が密接に関連してはいるが別個の相を持つ二つの側面、「個別的トラウマ」と「集合的トラウマ」[9]からみることができると述べている（Erikson 1976a=2021:176）。

「個別的トラウマ」についてエリクソンは、「自我に対するダメージ（Damage to the Self）」と表現しているときもある（Erikson 2017：50）。あまりにも突然に、また強烈に防御を突破されたために、精神がダメージを受けうまく反応できなくなるのである。凄惨な破局ではよくあることだが、被傷者は、自らの内に引きこもり、心が麻痺したように感じ、恐怖におののき、自らの無力さに打ちひしがれ、極度の孤独に陥る（Erikson 1976a=2021:176）。

これに対して「集合的トラウマ」は、社会生活の基本的構造が打撃を受けることによって起きる。集合的トラウマは、いわゆる「トラウマ」という言葉から連想される突発性とはかけ離れており、気がつかないくらい、ゆっくりじわじわと人々の意識に作用してゆく。人々を結びつけていた絆が破壊され、コミュニティの内に生きているという感覚が傷つけられる（Erikson 1976a=2021:176-77）。

これら二つのトラウマはきわめて密接に関連しているが、どちらか一方だけでもありうるという意味では別個のものである。例えば、自動車事故

8　Erikson, Kai T., 1976, Disaster at Buffalo Creek. Loss of Communality at Buffalo Creek, *American Journal of Psycharitry*,1976 Mar.133(3)302-5。この論文でエリクソンは「長い時間をかけて育んできた馴染みの場所や人との紐帯から引き離されたとき、彼らは士気の低下（demoralization）、見当識障害（disorientation）、つながりの喪失（loss of connection）を経験している」と指摘している。

9　本論文が参照するほぼすべてのエリクソンの文献において、「個別的トラウマ」と「集合的トラウマ」の説明が、ほぼ同じ文言で繰り返されている。ただ、ここでは、すべて初出の（Erikson 1976a=2021）から引用することにする。

の結果、精神的な傷を負ったが、コミュニティとの接触を失っていない人は、個別的トラウマにのみ苦しんでいるといえる。これに対して、例えばスラム街の一掃計画で自らが属するコミュニティが剝ぎ取られ、頼るものがなくなったために、健やかに生きているという感覚が薄れ始めた人は、集合的トラウマに苦しんでいるといえる。そして、人為災害では、この二種のトラウマは同時に生じ、一つの連続体として経験されることが多い（Erikson 1976a=2021:178）。

エリクソンいわく、過去数年間にわたり、いろいろな種類の調査活動を通して、それぞれが異なる多くの人災の現場に赴いてきた。破壊的な洪水に見舞われたバッファロー・クリークの他に、原発事故が起きたスリーマイル諸島を環状に取り巻く近隣地域、オンタリオの北西にあるグラッシー・ナロウズというオジブウェイ・インディアンの保護地はその地域の水道が汚染されただけではなく、保護地の位置さえも変更を余儀なくされるという悲劇に見舞われた。そして、コロラドにあるイースト・スワローという集合住宅地は、地下にガソリンが漏れるという災難が起こった。こういった現場を経験しながら、トラウマという用語が持つ何らかの意味が、そこで遭遇する人々の状態だけでなく現場の質感そのものさえも最も的確に表現していると感じたという（Erikson 1995=2000:271）。それもそのはず、何らかの毒物がからんだ環境汚染などの人災では、「災害ユートピア」のような現象は起こらなかったと、エリクソンは指摘する。災害ユートピアが起こるような「治療共同体（therapeutic community）」に対して、むしろそうした地域では、あまりにも小さなグループへと分裂していく「腐食性のコミュニティ」（Freudenburg,1997）と呼ばれるものが現れる。断層の線が開くと、大抵は、災害によって多大なる損害をこうむった人々と被害を受けなかった人々が分かれるのである（Erikson1995=2000,282）。皮肉なことに、自然の災害からわれわれを守ってくれる技術的な進歩は、専門家が技術的な災害と呼ぶまったく新しい種類の災害を作り出した（Erikson1995=2000,283-284）。

こうしたトラウマによって、人間の最も基礎的な安心感のもとになる基本的信頼が修復不可能なまでに損傷するとエリクソンは言う。池の波紋が同心円状に広がっていくように、人間は本来、信頼の層によって幾重にもおおわれているが、トラウマを受けるという経験は、最悪の場合、自己に対する自信の喪失だけを意味するのではなく、家族や共同体という人間を取り巻く有機的組織や、人間による政治体制のような社会的組織、人類が生きていくうえで従っているより遠大な論理や自然自体の法則、そしてしばしば神に対する信頼の喪失をも意味する（Erikson1995=2000,294-295）。

原発事故は、家族や地域コミュニティといった共同体の有機的組織を傷つける集合的トラウマ・イベントである。原発事故に遭遇した人は、自分たちの生活をその基底から支える家族や地域コミュニティの網の目が傷つけられたのである。こういう意味では被災者は「被傷者」である（宮地2021:13）[10]。それは、人と人を結ぶつながりを損傷し、それまで人々の間に浸透していた連帯意識を傷つける。こういったつながりや連帯意識こそが、個人の痛みに対するクッションや互いに親しみを持てる環境を用意し、人々を結束させる伝統を貯蔵する場所としての役目を果たす（Erikson 1995=2000:278-280）。だが、原発事故はこういった共同体の構造に、もともと走っていた断層の線をこじ開けて、共同体をばらばらの断片へと分裂させてしまう。

また、自らのコミュニティがばらばらである限り、個別的トラウマからの回復は難しいと感じてしまいがちである点も強調しておきたいと、エリクソンは指摘する。時間はあらゆるものを癒してくれるが、圧倒的な心的トラウマだけは別だというのが精神医学一般のセオリーである。しかし、血の通ったコミュニティの存在と調和した場合には、時間は特別な治癒力を持つ。それを示す十分な事例が実際に存在するとエリクソンは主張す

10　災害や暴力など、さまざまな外的要因によって、心にストレスを抱え、それが深い傷、トラウマとなって苦しんでいる人々がいる。その人たちのことを「被傷者」と呼ぶことにしようと、宮地は提案している（宮地尚子 2021）。

る。だとすれば、個々人の内心の傷ばかりに注目するのではなく、コミュニティの社会生活を形づくるものの中にどのような傷があるのかに注目する必要がある（Erikson 1976a=2021: 178）。

3. 腐食性のコミュニティと回復の共同体

冒頭で指摘した通り、有害物質によって大規模な環境汚染が疑われる地域は、トラウマを抱えたコミュニティが出現する。これらのコミュニティの最大の特徴は、人間関係が大きく変容し、自己や他者、家族に対する基本的信頼が低下することにある（Krieg 2009:S29）。Freudenburg は、自然災害とは異なる技術的災害について、「被害のあいまいさ」、「腐食性のコミュニティの出現」、その結果、「社会文化的構造への脅威」が生じることは「古くからよく知られたもの」だとした上で、汚染事故は物理的な面では自然災害よりも劇的ではないかもしれないが、それがもたらす社会経済的な影響についてははるかに深刻である可能性を指摘する（Freudenburg1997:19-20）。

このような長期的な危機によって腐食性のコミュニティがたどる道のりを「回復への道のり」へと向かわせることができないか、それが私たちの問題意識の原点である。

「腐食」（分断）への道のり	「治療」（回復）への道のり
社会的分断の増幅	社会的連帯（凝集性）
非難と恥の戦略（承認の欠如）	尊敬と寛容
権威への深い不信感	助け合いと協働
無力感、コントロール感覚の喪失	コントロールの感覚
一方的・トップダウンの情報伝達	民主的協議と参加
被害者の周縁化、排除	社会から疎外された人々の包摂

Erikson、Freudenburg、Krieg らの指摘をもとに筆者が作成

福島では、原発事故がなければ受苦せず済んだはずの不安、家族や地域コミュニティにおける葛藤、悩み、軋轢、出費、名乗れない状況、いろんな意味で当たり前の生活ができなくなり、全人的被害というべきものがあった。将来の不安、孤立･孤独感、不公平感、もやもやした感じが依然、残っている。この10年余、除染が進み、生活も元に戻りつつあり、避難区域に比べれば、福島県中通りは落ち着いてきた。しかし、家族にも言えないトラウマを抱え、地域コミュニティでも語り合える雰囲気ではない。

トラウマを抱えたコミュニティでは、基本的信頼の浸食（erosion）、社会的基盤や集合的意味の破壊が起きる。自然災害とは違い、有害物質がかかわる人為災害としての原発事故では、お互いに支え合うような共同性は失われる危険性が高い。そうしたトラウマを抱えたコミュニティに共通する代表的な特徴を私たちが取り組んできた福島県中通りにおける長期追跡調査結果の中にみることができる。例えば、「将来不安」とも関わる放射能の情報に関する不安[11]に加え、補償をめぐる不公平感、いじめや差別への不安の三つが高止まりしているのだが、その背景には、政府や東京電力、専門家といった他者への基本的信頼が低下していることの影響が考えられる。

これまで調査してきた福島県中通りは、避難区域に隣接し、健康影響の不確実性が高く、リスクへの対処が先鋭に問われる地域である。こうした地域特性のため、事故直後から放射能リスクの受け止め方も、避難、外遊び、地元産食材の使用などについての対処の仕方も多様であった。また、避難指示区域から移住した避難者と以前から中通りの住民である人たちとの間で、あるいは避難区域外避難者への住宅支援打ち切りにおいては、自主避難者と中通りに滞在する住民との間で、補償や支援策をめぐって葛藤

11　Speckhardは、有害物質による汚染の心理的余波について述べた論文の中で、情報が中心的なストレス源となることを指摘している。チェルノブイリの原発事故において、科学者が被ばくによるリスクを適切に予測することはしばしば困難であった。そして、汚染の影響を受けた人々は、事故やその防止、浄化に責任を持つ人々への信頼を失うことが多い。公式ルートに対する信頼が失われると、汚染に関する矛盾し混乱した情報が非公式ルートから流れてきて、混乱と警戒心を引き起こすことがよくある（Speckhard 2006:203-4）。

や分断が生じていた。

調査対象者[12]は、原発事故当時、3歳児とその母親（保護者）に限定した。二つの理由からである。第1に、2008年度出生児は原発事故当時1～2歳で、本格的に外遊びをはじめる時期であり、子どもの生育過程において保護者が初めてさまざまな選択を迫られる年齢である。したがって、目に見えない持続的な放射能被ばく不安がもたらすさまざまな影響を判別する上で最も適した年齢層であると判断した。

第2に、3歳児健診によって健康・生育状況が判明する時期でもあり、その後の生育状況を追跡研究することにより、幼少期の生活環境がその後の成長・発達にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることができると考えたからである。これまでの長期追跡研究の知見では、幼少期の生活環境と人生で起こった出来事の積み重ねの結果として、心身の健康、認知機能、学業や就職など社会的達成度が大きく規定されることが示されている。

調査の基本設計は、先行する調査において回答があった方を対象に後続の調査を行う「前向きコーホート調査」である。回収状況は、表1の通りである。

表1　回答状況

第1回調査（2013年）			第2回調査（2014年）			第3回調査（2015年）			第4回調査（2016年）			第5回調査（2017年）			第6回調査（2018年）			第7回調査（2019年）			第8回調査（2020年）			第9回調査（2021年）		
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
6191	2628	42.4	2628	1606	61.1	1605	1209	75.3	1297	1021	78.7	1026	912	88.9	1019	832	81.6	936	814	87	893	725	81.2	923	678	73.5
1203			718			746			612			549			451			440			377			365		

A：調査対象者数　B：回答数　C：回答率（%）

下段：自由記述記入者数　　2021年3月23日の時点での数（2021年6月10日現在：B:680）

12 「調査対象者」は「調査参加者」と同じ意味であるが、文脈に応じて使い分けていることを断っておきたい。

原発事故後の日常生活の変化について、2013年1月の第1回調査では12項目を「事故直後」、「事故半年後」、「この1ヶ月間」の三つの時期に分けて質問した。第2回調査以降は、上記12項目に加えて、「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない」、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」の2項目を追加して14項目を質問した。ここでは、2013年1月から2021年1月までの9時点の原発事故による生活変化の傾向を示す（図2）。

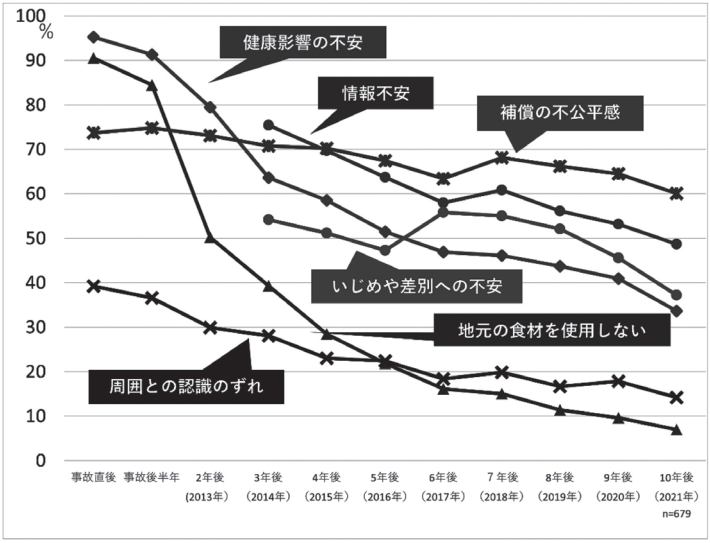


図2 原発事故後の生活変化

原発事故後の生活変化にはいくつかの傾向が確認できるが[13]、ここで注目したいのは、事故から8年以上経過した時点で、5割以上が「あてはまる」

13　その他に、次の三つの傾向がみられる。ゆるやかな減少傾向にありながらも約3割の方が「あてはまる」（「どちらかといえばあてはまる」を含む。以下同様）と回答しているのは、「健康影響への不安」、「経済的負担感」、「保養への意欲」、「子育てへの不安」の四つの項目である。「あてはまる」が急激に減少し、その後、横ばいとなっているのは、「地元産の食材を使用しない」、「洗濯物の外干しをしない」、「避難願望」である。事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移しているのは、「放射能への対処をめぐって配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」である。

（「どちらかといえばあてはまる」を含む。）と回答し、高止まり傾向が続いている3つの項目、「補償をめぐる不公平感」、「放射能の情報に関する不安」、「いじめや差別への不安」である。

原発事故という「非日常」からゆっくりと「日常」へ戻りつつあっても、生活や意識のなかでは今なお影響が続いていることがこれらの調査結果からわかる。とりわけ、補償の不公平感、放射能に関する情報不安、いじめや差別への不安、健康影響不安、経済的負担感、保養意欲などが高い比率のまま推移しており、放射能への対処をめぐる認識のずれが持続していることが表れている。すなわち、原発事故から10年以上が経過したものの、子どもをもつ母親の生活にはいまだ大きな影響が及んでいるということを示している。

また分断という観点でみると、福島における分断は次の三つの項目で観察できる。第1に、補償をめぐる不公平感である。これは主に福島県内の浜通りとその他の地域との間の分断として現れている。第2に、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」（以下、「いじめ・差別への不安」）は、近所や友人・知人の間でも生じるが、多いのは、県外と福島出身者・在住者との間に生じている。第3に、放射線監視装置（モニタリングポスト）の撤去をめぐる賛否は、同じ地域で子育て中の母親同士の分断である。

補償不公平感は上で確認したとおり、原発事故後の生活変化の中で最も高い割合で推移し、分断を象徴する項目である。では、補償をめぐる不公平感は、主に誰が抱いているのか。それは、学歴や収入が低い層、ゆとりがない層であり、居住年数が「1年未満」と「20年以上」の層、サポートネットワーク数が少ない層である。

次に、「いじめ･差別への不安」についてみると、最も多いのは、将来、福島出身であることで差別を受けるのではないかという不安である。また、これとも重なる内容も含んでいるが、結婚する時の差別不安と、他県の人から既に差別を受けた、または現在差別を受けているというものもあ

る。では、どういう人が、いじめ・差別への不安を抱くのか。それは、学歴が高い層、そして、居住年数が20年以上の長い層である。

2021年1月の第9回調査では、原発事故の風化を「感じる」という回答が初めて6割を超え、「どちらかといえば感じる」を加えると、9割近い結果になった。「風化を感じる」という回答には10年を節目として、「前を向こう」という内面からの声と、忘れられることに対する不安の両方の側面がある。風化には、いつまでも事故に引きずられず日常の生活に戻りたいという思いと、将来あるかもしれない事故の影響について忘れることができないという複雑な思いが交差している。

本調査はすでに述べたように、福島県中通りの限られた世帯を対象としたものである。したがって、本調査結果が福島のすべてにあてはまるとは言えない。ただ、福島は人為災害によって有害物質による大規模な環境汚染が疑われる地域であり、広範な地域が被害の対象となっている。こうした環境汚染が個人の心身の健康への影響だけでなく、家族、地域、友人・知人といったコミュニティの有機的な組織にも影響を与え、基本的信頼を低下させ、それが長期にわたって地域の集合的アイデンティティの損傷や集合的効力感の低下を招来する可能性がある。加えて、補償問題などをめぐる紛争が長期化することが予想されるという点が特徴として重なっている。

4. 見えない傷、フラッシュ・フォワード（Flash forward）

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」（サン＝テグジュペリ 2006:108）という台詞は『星の王子さま』に出てくる有名な一節である。目に見えない放射性物質は、しばしば人間の精神に恐怖を生み出す。というのは、それは五感では直接確かめられないので、そこから自分自身を守る方法がはっきりしないからである。したがって、放射性物質への曝露またはその恐れは、特有の心理的反応を引き起こすのである。本節ではそうした特有の心理的反応・フラッ

シュ・フォワードについて、調査結果を参照しつつ述べる。

「子どもの健康を考えると、(他県産の商品を）買わざるをえないし、やはり、将来がとても心配。もし、病気になったときに、こうかいしたくない・・・。あの時、ちゃんとしていればと・・・。この先 、結婚する年齢をむかえた時にも、原発のあった、福島の女の子だからと、相手の方からけねんされることはないだろうかとか、考えれば、考えるだけ問題はつきないのですが・・・」(2013 年の第 1 回調査）

放射能への不安について。自分自身、放射能がある生活に慣れてしまったことに不安を感じる。家の周辺は約 0.2 μ sv と決して低くはないが（と思っている）こんなものだと思って暮らしていることにたまにハッとする。食べ物について、市場に出回っているものは大丈夫だとは思っているのだが、「福島県産」となっていると、つい手を引っこめてしまう自分がいる。何か重要なこと（情報）が後々出てくるのではないかと思うと、不安である（2014 年の第 2 回調査)。

まだ 5 年、もう 5 年そんな心境です。震災後、避難して 2 年後にまた福島へ戻ってきました。福島産の野菜や米は、食べないようにしたり、外遊びに抵抗を感じたり、戻ってきた直後は、いろいろ気を使っていましたが、今は空間線量もだいぶ下がり、大手スーパーなら、信頼できるかな・・・と福島産のものを購入したり、外遊びは全く心配しなくなりました。ただ、10 年後、20 年後のことが、不安になってきています。子供達が、病気にならないでこのまま元気でいてくれることを願うばかりです（2016 年の第 4 回調査)。

地元産の食材は使うし、洗濯物も外に干す、外で遊んだりもする生活をしています。ただ、子どもが大きくなったとき、県外に暮らす場合

に周りの人にどのように思われるのか心配です。身体の健康も、現在より未来により不安があります（2019 年の第 7 回調査）。

ここに 4 人の調査対象者の母親の声をあげてみた。ご覧のとおり、2013 年の第 1 回「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」から 2021 年の第 9 回調査まで、子育て中の母親の声の通奏低音のようなものが、「原発不安」である[14]。ここでいう原発不安とは、一般に放射線に曝露し、健康に影響が出ることを恐れる「放射能不安」よりも広い概念である。原発不安は、原発事故による現在の子どもの健康影響、精神的な影響に加えて、「将来の健康不安」、「いじめ・差別不安」、「情報不安」が大きな位置を占めている。

原発事故後、福島で子育て中の母親が抱く「将来の健康不安」には、放射能による健康影響や被害に対する不安もあるが、それに加えて、「病気や不都合が後から出ないかという不安」、「漠然とした将来の健康不安」の声が多く含まれている。次に多いのは「いじめ・差別不安」であるが、こちらは、「結婚・就職」、「（福島）県外に出た時」の差別や偏見を恐れる不安である。さらに、「情報不安」とは、「情報が信じられない」、「正しい情報を知りたい」、「不安をあおられている」という声が多い。

こうした原発不安、とりわけ「将来に対する不安」は、外傷性の出来事としての原発事故の特質に由来するフラッシュ・フォワード（Flash forward）に通じるものがある。フラッシュ・フォワードとは、過去に経験した放射性物質への曝露によって、将来、何らかの形の被害がもたらされるのではないかという予期不安のことである（Speckhard 2005:219）。チェルノブイリ原発事故による精神的影響を追い続けるウクライナ放射線医学研究センターのコンスタンチン・ロガノフスキー教授（精神神経学）[15]

14　調査票の自由記述欄の全体で「不安」や「心配」の声が占める割合は時間が経過してもほぼ 6 割を占めていたが、2020 年に 5 割を下回った（成・牛島 2020:89）。

15　ちなみに、Loganovsky らの研究は 241 人を対象にした横断研究。そのうち 219 人が DSM-IV（精神障害の診断と統計マニュアル、アメリカ精神医学会 1994 年）基準に従って PTSD と

も、「放射線 PTSD（Radiation PTSD[16]）」という言葉で表現し、その特徴をフラッシュ・フォワード現象と予測ストレス（将来への恐怖と危険の予測）、身体表現性障害（うつ、特性および状態不安）などが含まれるという（Loganovsky and Zdanevich 2013）。

ロガノフスキー教授とのインタビューを木村は次のように紹介している。

> 「福島で起こったことでどのような心理的影響が考えられるかと言いますと、まずは PTSD です。それは特別な形になると思います。今回の原発事故によるものは、ベトナム戦争やイラク戦争など戦争によるものとは大きく違います。戦争の場合、過去の経験に何度も気持ちが戻っていきますけれども、原発事故の場合は、未来に対する不安、子どもたちに障害が起こるのではないかといったことを生涯考えるわけです。この違いが、精神科医あるいは心理学者、カウンセラーが注目しなければならない点です」と述べ、チェルノブイリ原発事故被災者の「フラッシュ・フォワード」という心理的な現象、強いトラウマ体験によって過去を思い出す「フラッシュバック」ではなく、将来への不安やおそれによるストレス状態が見られるとしている。（木村 2014:190-93）

将来への不安によるストレスが持続するフラッシュ・フォワードと類似しているのが、持続的な外傷性ストレス（Continuous traumatic stress）という概念がある。持続的な外傷性ストレスは、過去の外傷的出来事の経験だけでなく、現在と将来の危険のリアルな脅威がある状況で生活するこ

診断され、そのうち 115 人のチェルノブイリ事故の浄化作業員（34 人が急性放射線障害）、76 人がチェルノブイリ立入禁止区域、アフガニスタンでの戦争の退役軍人 28 人、健康な未被曝者 22 人。チェルノブイリ事故の生存者における放射線 PTSD の特徴と脳の基礎を探求することが目的（Loganovsky and Zdanevich 2013）。

16　PTSD（Post-Traumatic Stress Disorder：心的外傷後ストレス障害）

との心理的影響を説明する一つの可能性を提供する。

実は、放射線災害の不可視性[17]、そして、遷延化し、持続する脅威については、既にスリーマイル島原発事故においても指摘されたことである。とりわけ、エリクソンは、「放射線の長引く恐怖」という雑誌論文でいみじくもこのことを次のように表している。

> 「放射線緊急事態は、筋書きの法則に反する。すべてではないが、いくつかの緊急事態は、始まりが明確に定義されているが、被災者にとっては、決して終わることはなく、『オールクリア』などあり得ない。」（Erikson 1991:34）

放射能による健康影響への見方、価値観や立場の違いから生じる不安や対処行動の差は、ときに社会に分断や排除をもたらすきっかけになる。いやむしろ、それまで隠れていたかもしれない分断を顕在化させたのかもしれない。それまでの個人を支えてくれるものとしての共同体がもはや存在しないということを、そして、自我の重要な一部が消え去ってしまったということに気づくようになるのである。

福島県内の家族、近所、知人の間、避難区域と避難区域外、福島県内と県外といった幾重にも分断が見え隠れする。それらは常に顕在化しているわけではないし、治療を必要とするほど家族や地域コミュニティが機能不全を起こしているわけではない。だが、日常生活において「もやもや感」、「語りにくさ」、「いまさら口にしても仕方ない」といった様相を呈し、家族や地域社会におけるコミュニケーションや人間関係に影を落としている。集合的トラウマはこのように、長期間にわたり地域に影を落としていく。その回復のためには、上で述べたように「関係性のケア」、周囲の理

17　Vyner は、目に見えない環境汚染物質への曝露の主な心理社会的影響について説明し、既存の事例研究の結果の間に驚くべき類似点があることを「不可視のトラウマ（Invisible trauma）」と指摘している（Vyner, 1988）。

解やコミュニティの力を使って問題からの回復を促していく方策が必要である。

5. 回復への道のり：トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に

本稿の冒頭で、有害物質によって大規模な環境汚染が疑われる地域は、トラウマを抱えたコミュニティが出現することに触れた。これらのコミュニティの特徴は、集合的トラウマのため、人と人とをつなぐ基本的信頼が傷つき、コミュニケーションが途絶え、人間関係が大きく変容する。そして、それに相まって、身体的な支障（distress）や感情障害を抱える人が多くなる傾向がある。ただし、これらのトラウマを抱えたコミュニティがいつも機能不全に陥っているわけではない。通常は、健常なコミュニティであるが、何かの契機に腐食性のコミュニティ、すなわちトラウマを抱えたコミュニティとしての顔をのぞかせる時があり、その亀裂が際立つこともある。

原発事故後、この10年余りの間、子育て中の母親たちの認識や行動を分岐させるプリズムのような機能をはたしてきたものの一つが保養である[18]。この保養をめぐって、トラウマを抱えたコミュニティが治療共同体[19]に転ずる手がかりがないか、私たちの調査に寄せられた自由記述の中から、次のエピソードを紹介してみたい。

> 保養先で出会ったママ達とは、原発事故後の生活の価値観は合いますが、保育園や昔からの友人には神経質な人に思われるので、嫌だなと心では思う事があっても言えません。（A さんの 2015 年調査の自由記述）。

18　保養に関しては実践現場で優れた記録物が刊行されている。疋田（2018）、ほようかんさい編（2021）など参照。

19　コミュニティの力を使って問題からの回復を促し、人間的な成長を実現しようとするこうしたアプローチは「回復共同体」と呼ばれ、欧米を中心として世界各地で実践されている。ただ、運営組織や制度によって理念、対象者、目的、規模、活動内容や形態はそれぞれ異なる（坂上 2022:12）。

もうテレビで放射能についてやることもほとんどなく、情報もほとんどありません。あるとすれば、保養に参加した時にお母さん同士で情報を共有したり、保養の主催者の方からお話しを聞いたりするのみで、普段の生活では知るすべがありません。原発事故がすっかり風化していて、今まだ気にしているなんて、とてもじゃないけれど、まわりに言えない感じです。（A さんの 2018 年調査の自由記述）。

質問中にあった「保養」という言葉にはどうも違和感というか、抵抗感があります。学校や保育所の知り合いでそういう語を使う人を知りません。一部の方はよく使うようですが、どうも、私たちの街が危険視されているようで、嫌な気持ちにすらなります。（B さんの 2013 年調査の自由記述）。

私たちは仕方なく住んでいるのでもないし、国や東電にだまされて住んでいるのでもない。普通に楽しく暮らしてはいけないのですか？「保養」っていうコトバ、大嫌いです。「保養」しなければ生きていけないような所に住んでいると言われているみたいで。一部の人たちの意見ばかりとりあげるのはいい加減にしてほしいと思います。（中略）自分たち、福島で暮らす人間のことを特別視している人は、少数派です。でも、ほとんどの人は、声をあげません。少数派の人が大声で騒ぐのを、うんざりして眺めているのです。反論するのも面倒なので。そんな「現実」も知っていただきたくて、あえて、書かせていただきました。（B さんの 2017 年調査の自由記述）。

これは、福島県で同じ学年の子どもを育てている二人の母親の自由回答である。私たちは、A さんと B さんに直接連絡をとり、対面での聞き取りを行った[20]。

20　A さんは 2017 年 8 月 1 日（郡山市）、B さんは 2018 年 3 月 26 日（福島市）、それぞれ、聞き取りを行った。

聞き取りの中で、A さんは、放射能への懸念について話そうとすると「友達は全然気にしてないようなので、言うと、私は『神経質だからね』みたいにいつも言われてしまう」、「気にしてたら生きていけないよ、って言われちゃって」というように、不安を語ること自体を否定される体験を語った。周囲の「神経質だからね」という反応の背景に「気にしすぎるあなたの考え方がおかしい」という否定のメッセージを A さんは読み取っている。

一方、B さんも、「自分のことを正直ベースで言う場があんまりなくて。ごくごく親しい人にしか語ることができないので、日ごろそれをすごく抱えて生きているんです。うかつに自分の意見を言えない」「皆すごく遠慮して、かえって気を遣ってるんですよね」と語る。また、「保養」について発信している人達の言動が自分たちを傷つけると、次のように語る。

> 彼女達（保養について発信している人達）は、私達は意識が高いと web 上とかで言ってるんです。意識高い人はそういう活動に出るけど、という言い方をして、正直ベースで我々は非常に傷つけられています。じゃあ、あなた達意識低いの？　子どものことどうでもいいと思ってるの？と言われてて。（中略）（発信している女性たち自身は）意識してないんだけど、「意識高いんだよね、私達」というその一言で我々はすごく傷つくのと同じで…。

B さんにしてみれば保養に関して問題意識を持っている人たちの発信によって、「保養に問題意識を持っていない人は意識が低いのだ」とみなされているという否定的メッセージを受け止めているということだろう。

保養に関する意見の違う彼女たちは周囲の状況や環境によって、自分たちが感じていることを語りがたい状況にあることを指摘している。さらに、両者ともに、日常の何気ない会話によって、自分の考え・立場を否定されるメッセージを受けとり、傷つくという結果になっている。

また、もう一点考えておきたいこととして、果たしてＡさんのような選択をする人がいることが理由で、福島が特別視されているのかという問題がある。福島で原発事故が起きたこと自体は、歴史から消えることはない。たとえＡさんたちのような言動をする人たちが少なくなり、風化したように感じられたとしても、表面上は特別視をする人がいなくなったように思えるかもしれないが、ふとしたときに突然、「特別視」されるかもしれないという不安を拭い去ることは難しい。例えば、就職や結婚といった人生の大きな節目に直面する度に、福島出身であることがスティグマ（烙印）になりはしないかという不安も払拭することは難しいだろう。このような葛藤に関して、調査対象者のＣさんの語りを紹介する。

なかには保養という言葉に違和感や抵抗があり、自分たちの住む場所を危険視されているようで嫌な気持ちになる、私達は他の地域のように、普通に楽しく暮らしてはいけないの？保養という言葉が大嫌い、という意見もありました。

これを聞いて私は、原発事故後どれだけの福島のお母さん、保護者達が苦しんでこの９年間過ごしてきたのか、そして今もなお苦悩している、どうにも癒されない払拭出来ない思いの中暮らし子育てしているこの現状を、非常に辛く哀しく、そして悔しく思いました。

危険視して保養にも積極的に出掛けている私でさえも、実はそのような気持ち、痛いほどわかります。そして、私でさえもそう思うときだってあるのです。それは、むしろ人として当然の気持ちであり感情だとも、思うのです。（中略）

誰もが自分の故郷を、自分の街を愛したい。多くの人に訪れてほしい、いい所だねと言って欲しい。なのに、自分自身が我が街を否定しているようで。それはまるで自己肯定感の喪失とも言えるのではない

でしょうか[21]。

自分の故郷への「自己肯定感を喪失した」という体験は、集合的トラウマとしてコミュニティ全体が負っている体験と言えるだろう。そうした傷を抱えたコミュニティは、傷とどう向き合うのか。

家族や地域のメンバーの間に、人と人との間に生じた対人関係の亀裂を修復し、集合的トラウマを抱えたコミュニティを手当する術の一つとして「対話主義」が糸口になるのではないだろうか。その対話のコツは「しゃべらす、耳を傾けることだ」という（ヤーコ・セイッラク、トム・エリーク・アーンキル他 2016）。しかも、対話は「違い」から始まる。違いがあるからこそ、その違いについて興味が生まれ、対話が始まる（向後善之・久保田健司・大舞キリコ 2021:60）。

聞き取りを進める中で、B さんの言動には、若干の変化がみられる。聞き取り冒頭では、保養に行く人や福島県産のものを食べない選択をする人たちに対して、非常に否定的な発言がみられた。日常では、「正直ベースで言う場があんまりなく」「日ごろそれをすごく抱えて生きている」ということに傷ついてきた B さんは、聞き取りで本音を吐露した。それが聞き取りの終盤には、「私は保養という言葉が嫌いなだけで、私は行きたい人が行くのは自由だと思っている」という心情を語りはじめている。

日常では、本音を語ることがないため、口を開くと最初は傷ついた感情がまず語られるのは無理からぬことである。しかし耳を傾ける相手に語った後には、傷ついた感情の奥にある「行きたい人が行くのは自由」という意見が発話される。こうした語りにたどり着くことができれば、互いの立場の違いを否定するのではなく、受け入れ合う道筋がみえるのではないか。そうした違いを受け入れ合う道筋として、再び C さんの語りを紹介する。

21　FoE Japan 国際シンポジュウム（2020 年 9 月 12 日）の発言

私の話したことを聞いて「避難したお母さんが本当に羨ましくて仕方がなくって、自分を責め続けてきたけど、避難も本当に大変だったんですね」って言われたときに、私の中でこう、少しストンと落ちたというか。その方の気持ちも本当に今、言ってもらったのと同じように返してあげたいって感じだったんです。どっちにしても受けた被害は一緒で、被害者同士なので、それからの行動の事を責めたり言うんじゃなくて、本当に認め合っていきたいなと思いました[22]。

ここで、上で紹介したハーマンの言葉を再度、確認しておきたい。

周囲の人々が支持的に接してくれるならば、トラウマによる傷つきは大いに癒されるであろうし、逆に敵意に満ちた言辞や無関心が向けられるようだと、それがまた新たな傷つきを生んでしまう。トラウマのストーリーを共感的に傾聴してくれる者を得たとき、トラウマに遭遇した時点で失われた社会とのつながりや社会的意味の感覚は回復するのである。

B さんは耳を傾ける者を得たことで感情を整理し、その奥にある意見を語った。C さんは立場の違う人の共感的な語りを聞くことで「私の中でこう、少しストンと落ちた」というように心情が癒され、「言ってもらったのと同じように返してあげたい」「本当に認め合っていきたい」と、つながりあう意欲を持つこととなった。

互いの違いを踏まえたうえで、情報や考え、気持ちなどを伝え合って、共通理解を深めていくという働き、これを「分かり合うためのコミュニケーション」という[23]。集合的トラウマを手当するには、伝え合う者同士が、

22　FoE Japan の「福島見える化プロジェクト」によるインタビュー映像（2019 年 11 月収録）
23　「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」文化審議会国語分科会（2018 年 2 月）

互いに心地よい距離をとりながら伝え合う「方法としてのコミュニティ」[24]こそが必要だと言えないだろうか。そうした関わり合いの力によって関係の回復を支える試みとして、治療共同体というアプローチがある。治療共同体では、専門職に治してもらうというよりは、回復の場としての共同体を作り、ピアで他の人の話を聴くことや他の人への気遣いがそのまま自分自身のケアになる（藤岡ほか 2019:6）。個人のトラウマに比して集合的トラウマからの回復を支えるアプローチに関しては、未だ発展途上とも言えるが、傷ついた共同性を回復させること、関係性のケアを考える際、治療共同体の試みは参照点の一つになり得るのではないだろうか。

3・11 の後、調査票にあふれるほど記載された調査参加者の声をまとめて送り返す作業は、「愚痴」を共有する仕組みであった。これらの一連の取り組みは、調査参加者と調査実施者との間に信頼関係を構築するためのものであったが、継続した調査という行為が調査参加者の間に、共通の経験によるつながりと各自の経験を相対化する場を提供する試みでもあった。ピアという言葉は、元々「同僚、同輩、同級生、仲間、友人、対等な者」などの意味だが、ピアグループの活動には、アルコホーリクス・アノニマスや断酒会、あるいは障害者の自立生活運動から始まる長い歴史がある。21 世紀、地域の中の居場所や新しいタイプの対話の場を生みだしていくピアの新しい流れが出来つつある（村上 2021）。こうしたピアの文化の根源である「経験を共有する」ことの重要性が、分野を越えて認識されるようになったからではないだろうか。集合的トラウマを抱えるコミュニティの中で起きる沈黙や抑圧を軽減するためには、どのような関りが必要なのか。個人への「心のケア」にとどまらず、関係性に着目したアプローチ（Gergen 2009=2020）と、それによるネットワークの再生を図っていく試みがいま最も求められる課題ではないだろうか。

24　参加者が「目的のあるコミュニティ」を作り、自助グループを経験する。コミュニティこそが個人の回復の手助けをする（アービター・ナヤ、ムレン・ロッド、小松原織香、坂上香 2020:135）

6. 福島子ども健康プロジェクトの歩み

6-1　対象者の反発から信頼関係の構築に向けて

「福岡なんて遠いところからなぜ福島を調査するのか、興味本位でやらないでほしい」2013 年 1 月、当時「福島子ども健康プロジェクト」の調査事務局を置いていた福岡大学医学部公衆衛生学教室には第 1 回の調査票が現地に届いて以降、こうした苦情が相次いだ。調査対象である母親から受け取った電話の数は計 47 件に及ぶ。2013 年 1 月といえば、まだ原発事故から 2 年足らずで、食生活や子どもの遊び場、住まいの除染など、放射能への対処をめぐって混乱や迷いが続いていた時期であった。加えて、国やマスメディアなどさまざまな機関による調査が行われていた時期でもあった。確かに、現地からすれば、遠く離れた九州から、前触れもなく送られてきた調査票は「迷惑」以外のなにものでもなかったであろう。その上、遠方の研究者から唐突に当プロジェクトが主催予定の「語り合いの場」に対する意見を求められても、混乱の続く福島の母親からずれば、的外れであり、とうてい受け入れがたいものであっただろう。今、思えば、第 1 回調査の時点でこのような提案をすること自体、研究者の傲慢であったと言わざるを得ない。

私たちは、第 1 回調査に対する対象者の厳しいリアクションを受けて、調査参加者との関係構築を最優先事項の一つとして位置付け、取り組むことにした。調査票の自由記述欄に書かれた言葉を何度も読み返し、投げかけられた疑問や批判には、できるだけ手紙を書いて送った。また、調査に協力いただいた対象者の皆さんに何かこちらからお返しすることはできないかと検討する中で、「世界で最も長く継続的に実施されている主要な出生コーホート研究であり、人間の発達に関する長期追跡研究」と称される 1946 年 3 月に英国で生まれた人々を対象とした National Survey of Health and Development（NSHD：全国健康発育調査）を手本とすることにした。その研究チームでは毎年対象者に、自分たちの署名と最新の調査結果に関する情報を記したバースデイカードを送っていた。NSHD の

責任者である Diana Kuh は、長年にわたる追跡研究では、対象者との強い人間関係の構築が非常に重要であると語っている[25]。そこで私たち「福島子ども健康プロジェクト」では、毎年 1 月の調査実施の後、夏までには調査結果（速報値）を冊子にまとめた報告書や、調査参加者の声（調査票の自由記述）をまとめた論文、プロジェクト事務局の活動を掲載した「福島子ども健康プロジェクト便り」を送付した。

調査参加者の声（調査票の自由記述）をまとめた論文については、自由記述のすべてを読み込み、カテゴライズし分類し、分類項目ごとの意見及びその傾向を記述し、最後に全体の傾向や変化を踏まえた考察を行った。いわば、調査の回答を受け取った私達がどう受け止めたのか、応答するという作業であった。こうした応答の成果かどうかはわからないが、自由記述になんらかの書き込みをする人は、毎年、回答者の半数を越え、長文のものが相当数あった。（表）

	回答総数（2021 年 3 月 31 日時点）	自由記述記入数	記入率	文字数	一人当たり文字数
第 1 回調査	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第 2 回調査	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第 3 回調査	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第 4 回調査	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第 5 回調査	912	549	60.2%	100,690	183.4
第 6 回調査	832	451	54.2%	82,812	183.6
第 7 回調査	805	440	54.7%	84,872	192.9
第 8 回調査	725	377	52.7%	69,601	188.1
第 9 回調査	678	365	53.8%	75,340	206.4

調査が回を重ねる中で、その時々に、普段は周囲に語ることの難しい心情を吐露する場としても自由記述欄が機能していた様子のうかがえる回答もあった。

25　Helen Pearson, 2011,「揺りかごから墓場まで――英国コホート研究」,『Nature ダイジェスト』8(6) :8-13.

「このプロジェクトでは私が書いた内容に最初に反応してくださいました。すごく嬉しかったです。」（2015-704）

「このプロジェクトの小冊子を頂きありがとうございます。読んで色々な意見があるんだなと実感しました。これは、子供が成長し、大人になってからも、とてもためになる情報だと思うので、大切にしたいと思います。」（2015-927）

「福島子ども健康プロジェクトの皆様には、こうしてアンケートという形で、普段人に話せない悩みや不安を聞いていただき、それだけでも、いつも不安な気持ちがやわらぎます。こうして、福島の子供たちのこと、気にかけていただける方々がいる事にとても感謝しております。これからの益々のご活躍期待しております。」（2017-247）

さらに、調査参加者のお子さんには 2013 年 12 月からクリスマスカードを送付し、2014 年 4 月からは誕生日カードを送った。こちらについても、12 月に送付したクリスマスカードに対して、年賀状でお礼の言葉が寄せられるといった形で、コミュニケーションが往復するケースがいくつもあった。

加えて、夏休みや春休みなど長期の休みを利用して現地に出向き、自由記述で多くの言葉を投げかけてくださっている方、時には本調査に対して批判的な声を上げている方を訪問し、お話を伺ってきた。こうやって、一足飛びで調査参加者同士の「語り合いの場」を設定するより、まずは研究者が調査参加者と向き合い、信頼関係を構築したうえ、その積み重ねから、調査参加者同士の横のつながりをつくるという、二段構えに転換したのである。このような試みによって、自由記述欄からは調査参加者の心境の変化が読み取ることができるようになった。

6-2　二つのツールの開発と手記の製作

私たちが、調査参加者への聞き取りを進めていく中で、なぜこのとき家

族を置いて避難したのか、なぜ避難せずにとどまったのか、なぜ他の子どもよりも長い間、外遊びの禁止や長期休み中の保養プロジェクトへの参加など制限された生活を送らせたのか、それをいつか子どもに説明しなければならないと考える母親が多いことに気づいた。そこで、原発事故という出来事とそれに続く困難な時期を母親がどのような思いで、そしてどのように乗り越えてきたのかを子どもに語り聞かせるツールの作成を試みることにした。それが、、2019 年 10 月から対象者に案内を開始した「親子をつなぐサポートブック（以下、GIFT BOOK）」である。作成段階では、数人の調査対象者の意見を聞きながら何度も修正を繰り返している。GIFT　BOOK の構成は以下の通りである。まず、子どもが生まれた時の様子、寝返りからお座りといった成長段階でのエピソードとその時の驚きや感動を記載する。同じ頁には、その時々の思い出深い写真が貼り付けられるスペースを確保している。次に、原発事故後の母親の不安や困ったこと、行動などを記録するとともに、その時々の母親の思いを記載できるようにしている。最後に、「〇〇さん（お子さん）へのメッセージ」を書き込むように構成している。

そうして、これまでアンケート調査に回答した 923 名に働きかけたところ、希望者は 96 人と約 1 割に達した。その希望者に対して、上述したような構成の記入票を送付した。返送された記入票をもとに改めて GIFT BOOK を製本し、送付するということを想定していたのだが、返送された記入票は〇通だった。希望者数から減少した背景は、いくつも考えられる。改まった形で子どもへのメッセージを書くという作業は普通でもなかなかハードルの高い作業であるが、さらにトラウマとなりうるような体験について自らふりかえり記述する作業は、企画した我々が考えていた以上に、相当に困難だったのではないか。あるいは、トラウマ体験の影響は、日常生活を送る分には本人も意識していない場合があるから、心情としては「サポートブック」のようなものがほしいと思って希望するという連絡をしていても、いざ、自らの体験をふりかえり文字にしようと試みると、

思いがけず心理的にストレスが高い状況に陥ったのではないか。ひょっとすると、記入用紙に手書きで記入をして、それで満足された方が返送しなかったという可能性もあるかもしれない。

ただ、数は減ったものの、GIFT BOOK 参加者からは以下のような声が寄せられた。

「プロジェクトの皆様　今回このような、すてきな企画を考えてくださり、ありがとうございます。長年にわたり、福島と関わり、支えてくださること感謝致します。いつか、時間はかかると思いますが、元気を発信できる県民になります。」

「大変遅くなり、すみませんでした。メモしていた記録を読み返してとてもうれしい時間をすごしながら書くことが出来ました。よろしくお願いします。」

「前回ご案内を頂いた時はまだ、自分が向き合えていなかったようで、思い出したくなかったのですが、申込をせずにいた所、本当にこれで良かったのか一度きちんと心の整理をしたほうがよかったのではと思っていました。よろしくお願いします。いつも気にかけて頂きありがとうございます。」

「いつもサポートありがとうございます。先日、“GIFT BOOK” が届きました。気難しくなってきた長男に、あの時のこと、想いを伝えるきっかけになり、あたたかな時間を持つことができました。」

また、GIFT BOOK に対する意見や感想を聞き取っていく中で「GIFT BOOK の意味は理解できるが、自分が求めているものではない。子どもに見せるものとなると本音を書くことに躊躇する。それよりも、これまでの自分の調査票の回答や自由記載の内容の推移をまとめたものを作れないだろうか」との要望をいただいた。確かに、子どもに語る前段として、母親の中でこれまでの出来事をふり返り、当時の心境から一呼吸置くことで当時の状況を客観的に見つめなおし、整理していく作業が必要だろう。そ

こで二つ目のツールとして、これまでのアンケート調査の個別の結果をまとめた「ふり返り手帳」を作成することとなった。「ふり返り手帳」では、これまで継続して行ってきた質問項目からいくつかをピックアップし、個別の回答の推移とともに回答者の平均値の推移を重ね合わせている（真ん中の写真）。また、「ふり返り手帳」の最後の頁では、調査票の最後に設けてきた自由記述欄に書かれた自筆の文字をスキャンし貼付するとともに、文字おこししたものを掲載している。

GIFT BOOK 同様、これまでアンケート調査に回答した 923 名に見本を同封の上、案内を送付したところ、作成希望者は 186 名と 2 割に達した。「ふり返り手帳」を受け取った対象者からは、「ようやくこの調査が自分のものとなったような気がします」「これは自分の愚痴手帳だな。自分は日記をつけていないので、これを見てその時々の自分のありのままの姿を思い出します」との感想をいただいている。

これら 2 つのツールは、調査開始当初の福島の母親には「語り合いの場」が必要といった研究者からの一方的な思いとは異なり、長期に渡って調査対象者と関わる中でニーズを見出し、共に意見や感想を出し合いながら形にしたものである。加えて、2020 年夏より、対象者のこれまでの経験を記録した手記製作プロジェクトを開始した。このプロジェクトは、研究者が対象者への手記製作参加の呼びかけと原稿収集は行うものの、その編集に関しては研究者と手記製作に賛同していただいた数人の対象者との共同作業で行う予定である。手記の執筆から編集までを当事者参加型の形式で行うことに大きな意義を感じている。

ただ、「GIFT BOOK」、「ふり返り手帳」、「手記」の作成希望者はそれぞれ 96 名、186 名、27 名と希望者の数をみても、自分自身が記入したアンケート調査結果をもとにおきたことをふり返る（ふり返り手帳）の希望数は回答者全体の 2 割ほどでそれなりに多いが、親子でのふり返りを意図した「GIFT BOOK」がその約半数、「手記」はさらに少なくなっている。未だトラウマの傷は生々しく、10 年を経てもふり返ること自体が「向き

合えない」「思い出したくない」「時間がかかる」ものであることの表れとみることもできる。ただ、この２つのツールと手記製作プロジェクトが、それぞれのこれまでの生活や心境の変化を客観的に見つめなおすきっかけとなり、そこから未来へと踏み出すための第一歩となればと思っている。

7. 語り合いの場ふくしま

私たち「福島子ども健康プロジェクト」の目標は、福島原発事故によって失われた家族、地域における分断を修復する手がかりを見出すことにある。その一つの手段として原発事故後の困難な時期をどのように生き抜いてきたのかについて、調査参加者に働きかけ、少人数の母親が集まって語り合う場をつくる試みをした。

対象を調査参加者とした意味は、ひとつには、約 10 年におよぶ調査および調査結果のフィードバック等の試みによって築いた、調査実施者と調査参加者の間の一定の信頼関係に基づいて、語り合う場の心理的安全をある程度生み出せるのではないかということ。そしてなにより、調査参加者たちは、震災および原発事故を体験しており、同時期に中通りで子どもを生み、育てたという意味で、共通する背景をもつ当事者同士であるという意味で、ピアな立場であるということが、語り合う場をつくる上で、安心と安全を担保する側面があると考えられるからである。

もちろんこれまでに述べたように、調査結果からは、周囲の人間関係において価値観や認識の違いが人間関係に深い傷を引き起こしていることが読み取れる。基本的信頼を喪失している可能性の高い人たちであるから、日常生活を共にしている人同士で語り合うことは困難が大きいことが予想されるが、普段、顔を合わせるわけではないが、共通する背景をもつ当事者同士が集うということによって、広くその有用性が知られるピア・カウンセリングと同様の効果を得られる可能性があるのではないか。

エリクソンの「トラウマは共同体を作り出すことができる」という表現からも、ピアな立場にいる者同士が共感しあえる、わかりあえる可能性を

読み取ることができる。エリクソンによると、トラウマは人生の中心に位置するようになるが、その過程で、被害者は自分が他から引き離されて、特殊なものになってしまったと感じるという。ただし、トラウマを共有しているということが、連帯感を生み出しうる可能性もある。あるホロコーストを奇跡的に生き延びた夫婦は、一緒にいる理由について、次のように語ったという。

「彼が私を何者だか知っていて――彼がそれを知る唯一の人だったわけだけど――（……）、私が彼を何者だか知っていたから」。

または、イランで人質にとられたアメリカ人がお互いに再会したとき、そのうちの一人はある記者に対して「一緒にいるのは楽です。何も説明しなくてすみますから。私たちは同じ傷を負っているのですから」と説明したという。

こうした例を示した上で、エリクソンは、「実際、トラウマの経験を共有している以外はまったく共通性のない人々が、その共通性ゆえにお互いを求め合い、仲間意識を形成することがある。（中略）彼らは回復作業を始めるために必要な人間関係という下地を互いに提供し合い、互いの感情を和らげることができるのである。それは傷ついた者たちの集まりなのだ」と指摘している。（Erikson1995=2000,275-277）

福島の家庭や地域で、原発事故にかかわって価値観や認識のずれが生じ、人間関係に影を落としていることについてはすでに指摘している通りであるから、似た背景をもっている者同士であっても、それが必ずしも互いの感情を和らげることにつながるとは限らない。しかし、トラウマによって負った傷という、言葉にしがたい、語り難い体験や痛みに関して「何も説明しなくて」も通じ合える可能性があると言えるだろう。

そして、約10年にわたり調査を行ってきた調査実施者は、これまで調査参加者の体験をアンケートでたずね、読み込み、それらを整理して返し、またときには耳を傾けるために出向いたという意味で、「何も説明しなくてすむ」対象として受け入れられる可能性をもっている。――もちろんそ

こでは、起きた出来事を知っているだけでなく、調査参加者の疲労感・麻痺感・感情の鈍化を共有し得る感受性が求められるわけだが。

そのような条件があった上で、「語り合う」ことで回復する可能性を探ったわけである。

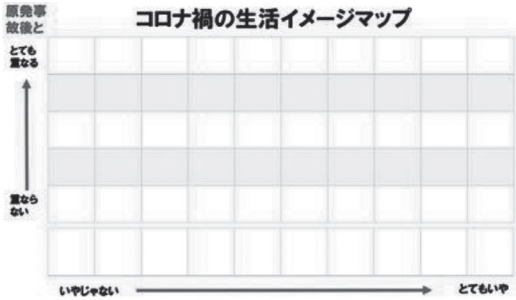
「どんな哀しみも、それを物語にするか、それについての物語を語れば、耐えられるようになる」（Arendt 1960=2015,216）。これは、ハンナ・アーレントが『活動的生』第五章のエピグラフに掲げた作家のイサク・ディネセンの言葉である。哀しみや受け入れがたい困難な現実に直面した時、われわれはほとんど無意識のうちに自分の心の状況に合うようにその現実を変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする。つまり、矛盾したように見える複雑で多面的な現実を自分の心に収めていくためには、一筋の、場合によっては複数の筋道（プロット）が必要である。そうした筋道の存在こそが物語の特徴である。

それぞれの物語を語り合う時、たとえ放射能をめぐる相互の認識のずれや対処行動の違いがあったとしても、「もし、私があなたの立場だったら、そう感じたかもしれない、そう行動したかもしれない」とそれぞれの認識と行動の「幅」を認め合うことができるのではないか。そのことで、家族と地域における分断の修復に向けた取り組みの第一歩となるのではないか。

時は折しも、新型コロナウイルスが世界を席巻した 2020 年。福島も例外ではなく、原発事故以来の見えないものに対する恐怖と日常生活の制限に地域住民が「あの当時」を思い返していた。「今なら原発事故の体験を語り合えるのでないか」「長期間、福島と関わり、調査参加者から 少しは信頼を得られた今なら、呼びかけに応じてくれる母親もいるのではないか」。そうした思いから、2020 年 11 月 に念願の第 1 回ワークショップ「語り合いの場ふくしま」を開催した。

ファシリテーターとしては、私たち研究者（成元哲、牛島佳代）のほかに、公益財団法人日本 YWCA 幹事佐藤純子氏にご協力いただいた。参加

者にはこれまでのアンケート結果の調査報告書、「GIFT BOOK」、「ふり返り手帳」などを持参していただき、原発事故後の生活をふり返り、語り合うことによって、その体験を共有する機会とした。語り合いの前提として、互いの考えや意見を絶対に否定しないことを条件とした。第１回のワークショップでは、参加者全員が初対面であったため、初回はまだ信頼関係の構築されていない他者と出会うという意味で、問題の核心ともいえる原発事故についての個々人の振り返りを語ってもらうのは時期尚早と考え、まずは2020年のコロナ禍の生活変化で特に印象深い出来事を「生活のイメージマップ」[26]として作り、このマップを利用し、各自、自分の物語を



今回のコロナ禍で、特に印象深い出来事、ベスト10は？

自分の体調が気になった（健康不安）	子どもや家族の体調が気になった	仕事（の継続）が気になった	仕事がなくなった（失業）	収入が減った	ニュースが気になった
いろいろな予防法を探した・試した	休校になった	家事が増えた	食費が増えた	（食費以外の）出費が増えた	家族で過ごす時間が増えた
人に会いにくくなった	気軽に外出できなくなった	（病院）受診するのも慎重になった	美容室に行きにくくなった	運動不足になった	体重が増えた
外出時はマスクをするようになった	友人・知人との温度差を感じた	同居家族との温度差を感じた	同居以外の家族との温度差を感じた	3密を気にするようになった	Withコロナのライフスタイルを確立した
もやもやした感じがする	人の目が気になった	差別を感じた	わかりあえない	将来への不安	お稽古事・スクール等が休みになった

コロナ禍の生活イメージマップ

26　イメージマップは、福岡大学医学部公衆衛生学教室の守山正樹教授（現在、同名誉教授）がヘルスプロモーションを目的に開発したものである。ここでは、個々人がコロナ禍での生活を振り返り、互いに語り合うことにより共通点や相違を見出し、自己の健康意識や生活のこだわりを意識化することを目的としてアレンジして作成した。

語り、対話を行うことにした。「生活のイメージマップ」は縦軸に「とてもうれしい」から「うれしくない」と、横軸に「いやじゃない」から「とてもいや」のマス目をつくり、そこに、「学校が休校になった」、「職場の休みが増えた」、「解雇された」、「コロナに感染するのではないか不安になった」、「家族以外の人に会いにくくなった」、「外出できなくなった」、「家族で過ごす時間が増えた」、「ニュースが毎日気になった」、「食費が増えた」などのイメージマップ作成のためのカードを用意し、そこに配置する。上記の中で、「原発事故後の生活と重なって思い出されたもの」を中心に、各自の経験を語ってもらい、対話を進めていった。

初回であったこともあり、補償の格差にかかわる不平不満を思い切り語り合うなど、感情の表出が一部でみられた。そうした話題に驚いた参加者もいたが、その参加者も感想では「福島県に暮らすもの同士、今回のように吐き出したいものは吐き出してまた明日を生きていければ良いと思いました」と記述しており、いかに普段、語りたいことを吐き出せる場が少ないかが読み取れた。また「他の参加者のみなさんのお話しをきき、悩んでいること、将来への不安、さまざまなお話しをうかがうことができ、苦しんでいるのは私だけじゃないと前向きに生きればどうにでもなるんじゃないのかなと思いました。」「まだ同じ世代の女性と話すのが怖いですが、参加して少し前向きになりました。」という感想もあり、“同じ”背景をもつ者が語り合う、ピアな場であることの意味が確認された。

以下、参加者からの声を紹介する。

「郡山市にいながらもなかなか話せないことを聞くことができて、改めて子どもたちを守るため、お母さん同士がつながれる一つのきっかけになると思いました。また機会があれば参加したいです。（略）参加者の皆さんの発言の中で、震災後の方が子どもたちを守る術が見えず、辛かったと話されていることは同感でした。そして、原発の立地市町村から避難されてきた方達の郡山市での生活の実情など、私は知らないことも多かったの

で、驚きました。ただ、私は補償を受けている方が福島県内で消費してもらえば、経済的に助かる人も多いと思ってもいます。福島県に暮らすもの同士、今回のように吐き出したいものは吐き出してまた明日を生きていければ良いと思いました。」

「私を含め4人だけの参加でしたが、とても有意義な時間を過ごすことが出来て、参加して良かったと思います。震災当時は子どもと家族を守るだけで精一杯で見えない放射能におびえつつ、外遊びも出来ない状況がいつまで続くのかと不安でしかなかったです。子供は平等であるはずなのに、格差を生み、人の絆さえも断ち切ってしましました。それはコロナ禍でも変わらず、娘の通学する高校でもコロナ患者が出たというだけで冷たい目で見られ、一時は制服を着用しての登校も出来ないくらいでした。他の参加者のみなさんのお話しをきき、悩んでいること、将来への不安、さまざまなお話しをうかがうことができ、苦しんでいるのは私だけじゃないと前向きに生きればどうにでもなるんじゃないのかなと思いました。」

「福島子ども健康プロジェクトさんの語り合いの場に参加させて頂きまして、ほっと話しができる、聞ける場を、設けて頂けてとても励みになりました。コロナ禍…いつまでもみえない道路をいつまでも歩いている感じの日々で不安だらけですが、原発事故後と振り返ってみると手探りで迷いながら生活している事と重なるところ、子どもたちの健康や外遊びの制限等いくつかの課題を必死に歩んできたところがとても重なっています。いつもプロジェクトさんには心配や配慮をして頂き、感謝しております。今後共、繋がって頂けたら嬉しいです。宜しくお願いします。」

「震災からもうすぐ10年を迎えるにあたり、話せる場を設けて下さりありがとうございました。原発事故が風化しつつあり、また最近はコロナ禍で、震災について語る場が本当に少なったなと感じます。最近のニュース

のあり方（過剰なほどにコロナへの不安を煽るマスコミ）や、政府への不信感、将来への不安など、コロナ禍と震災が重なる部分が多々あると思いました。私は今後も、非常時には正しい情報を受け取り、後悔しない判断をする、それを続けながらこの福島県で生活したいと改めて思いました。震災から10年が経ちますが、娘が被爆した事実は変わらず、今後も付き合っていかなければならないのだと、ワークショップに参加し改めて感じました。」

その後の回でも、2021年2月13日に起きた「3・11」の余震といわれる地震の被害についてをテーマとするなどしながら、第6回まで開催したが、2021年4月以降、コロナ禍の一層の深刻化により、「語り合いの場ふくしま」は休止せざるを得ない状況となった。

8. 福島の被傷者の基本的信頼の回復の一助に―問題を風化させず記録を残す

最後に本節では、ここまで紹介した取り組みについて、集合的トラウマを抱えた地域における分断修復という観点からふりかえることとしたい。原発事故後の福島では集合的トラウマが起きていると推定される（成・牛島　2022）。ただ、いうまでもなく、調査参加者が病的なところまで精神的に追い詰められているというわけではない。精神的な病理であれば、個別に治療が必要であるが、家族や地域がコミュニティとしてトラウマを抱え、人間への基本的信頼が損なわれているという状態であるから、個別的な治療というアプローチではなく、集団としての共同性の修復、または、新たなつながりの創出を促すことが必要ではないかということである。

回復の道のりをたどるためには、対話が有効であると考えられるが、基本的信頼を喪失している人たちにとって、見知らぬ人、あるいは身近な人と対話をはじめることは簡単ではない。なにより、心理的安全の確保が重要となる。

対象は調査対象者、つまり、原発事故当時、同じ中通りで被災した同じ年齢の子を持つ保護者同士とした。地縁によるつながりではなく、原発事故後、放射能が子どもにどのような健康影響をもたらすかといった不安を抱えたといった体験を共有し合える当事者同士という意味でピアな立場な調査参加者の横のつながりをつくることをめざした。10年ほどの年月のあいだ、調査結果をフィードバックする等の遠距離からの働きかけによって地道に信頼関係を構築し、それから対面での対話を試みるという二段構えで取り組んだ。

ここまで述べた一連の試みについては、すべて調査参加者全員を対象に案内を送付し参加を働きかけた。「サポートブック」「ふりかえり手帳」のについては、対象者の1～2割から応答があった。対面で語り合うことをめざした「語り合いの場ふくしま」およびセミナー参加者は、個別にヒアリングを行ったことのある顔のみえる関係性のある人が中心で、いずれも参加人数はほぼ一桁に留まった。その背景としては、コロナ禍の影響の他、思春期に差し掛かる子ども達の子育てや日常生活に忙殺されていてわざわざ出かける時間を割くことが難しいという状況もあるだろう。同時に、集合的トラウマを抱え、社会関係資本が希薄なコミュニティにおいて、オープンに「語り合う」ということが未だ困難であることを示す結果だと捉えることもできるかもしれない。

それだけ困難な中でも、「語り合いの場ふくしま」に参加した人たちは、調査実施者と参加者とのこれまでの個別のつながりによる信頼関係がある程度形成された人たちであった。そうした個別の信頼関係が、心理的安全を支えたため、語り合うことを可能にしたと推測される。

集合的トラウマを抱えたコミュニティにおいて「語り合う」場をつくり、維持し、ピアグループとして成長させていくことは容易なことではない。そのため、2022年は子育てに関するテーマを設定し、自分たちが違うものを見ているのだということに気づくことによって、それぞれの観察を互いに観察し、これまでの自らの体験をふり返るきっかけをつくる試みを

行った。コロナ禍の影響で「語り合いの場ふくしま」の開催を休止せざるを得ない状況となった１年後、改めて調査参加者同士がつながる機会を設けることを企図し、全４回の連続セミナーを開催した。そこでは、調査参加者の子どもたちが思春期に差し掛かったタイミングを捉え、テーマを「子育て」とした[27]。

これまで寄せられた調査票の自由記述の中には、震災や原発事故の子どもへの身体的・精神的影響を懸念するものがあった。調査参加者、あるいはその周囲にいる人々の中には、未だ震災および原発事故の影響をめぐって意識や感覚のずれ、や対人関係の困難などが持続している人、トラウマの影響のある人もいることが想定されたため、セミナーの内容としては、子育てをテーマにしつつ、参加者自身の心理的安全の確保や、自らの置かれた状況を捉え直すきっかけとなりうる理論を紹介し、その考え方から関係性のケアを行うことをねらいのひとつとした。さらに最終回では、福島原発事故をめぐって県内と県外、避難区域と区域外、避難区域外の内部などにおいて大きな課題となっている無意識の偏見・差別（Microaggression）[28]に関して学び、考える内容を盛り込んだ。

意見交換の中で参加者同士が知り合い、徐々に関係性を構築することをめざして連続全４回とし、各回で参加者の交流の時間を設けた。何より大事なのは、調査参加者同士の対話を生み出すことであり、そのための場づくりをめざした。

一連の試みでめざしたのは、参加者同士がサークルのように信頼関係を構築し、自律的に対話の場をゆるやかに続けることであるから、今後も、参加者同士が関係性を構築し、ピアグループとして成長させるための働きかけが必要になる。こちらは、治療共同体でいうところのファーストサー

27　子育てに関する連続セミナーは栗本知子氏（あおぞら財団特別研究員）をコーディネーターとし、講師である水木理恵氏（福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター助手、カウンセリング心理学）と出口真紀子氏（上智大学外国語学部教授、文化心理学）の協力を得た。
28　ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである（Sue 2010=2021:34）。

クルの立ち上げに似たものである（藤岡編 2019：82-83）。

サークルが軌道にのるまでには、スタッフが治療共同体のバウンダリー（境界線）を守ることが重要である。徐々にコアな参加者から新たな参加者迎え入れていく方向をめざすのであれば、なおのこと、安心感・安全感をつくるためには、参加者自身が語り合う場をどのような場にしたいか、民主的に、どのような価値と理念を大切にするか、語り合い共有するステップが大切だ。（藤岡他 2019：82-90）

有害物質によって大規模かつ長期的な環境汚染が疑われる地域、そして、こういったイベントがもたらす集合的トラウマによって、権威に対する信頼や基本的な人間への信頼が損なわれた人たちにとって、自分の所属するコミュニティに対するコントロール感覚を取り戻すことは非常に重要である。従って、語り合うことのできるグループ、サークルをつくる上で、参加者たちが、その場でめざす民主的な理念――「排除よりも包摂」といった回復の道のりに向かうための理念や話し合いのルールといった基本的前提について、自分達で話し合って、自分達で決めることが極めて重要である。基本的前提を参加者自身が話し合いを行って獲得していき、安心感を保ちつつ、これまでの互いの体験を聴く、語る関係を通じて、共同体に対する信頼感と自己成長を図っていくことのできる場づくりを促すことが重要である。

ワークショップ「語り合いの場ふくしま」が目指すのは、調査参加者に限定することなく、そして語りの焦点を原発被害に限定することでもなく、開かれた対話の場を福島の内部に築くこと、そして、これに触発され、地元の母親が自分たちでも対話の場を作ってみたいと思えるような仕掛けを行う対話実践である。私たち研究者の介入が途絶えたとしても、自分たち自身で対話の場を作り続け、単純な合意や結論ではなく、複数の主体による複数の声がポリフォニーを形成し、そのことが分断修復の方策とその仕組みを作ることにある。私たち研究者の役目は、その基盤を作ることにあると認識している。

原発事故からの再生あるいは回復は各人各様であり、自分なりに事実を受け入れ、折り合いをつけていくプロセスを尊重することが重要である。福島原発事故による分断および集合的トラウマが直ちに修復できるものではないが、「関係性のケア」に向けたいくつかの種をまくことはできたのではないだろうか。本プロジェクトは、少なくとも調査参加者の子どもが成人するまで、関わりを継続し、経過をフォローする予定である。

集合的トラウマは、長期間にわたり地域に影を落としていく。従って、その回復を時間の経過にゆだねるだけでは不十分である。長年、トラウマからの回復を支える様々なアプローチは考案されてきたが、そのほとんどが、「個人のトラウマ」に焦点を当てたものであった。本研究の成果を発信することで、日本において、有害物質によって広い範囲で長期的に汚染が起きた際のリスクの大きさについて認識が深まるとともに、集合的トラウマの回復を支えるアプローチについて、広く検討されていくことを期待したい。

【文献】

Abramowitz, Sharon, 2005, “The poor have become rich, and the rich have become poor: Collective trauma in the Guinean Languette”, *Social Science & Medicine* 61(10):2106-2118.

Aldrich, Daniel P., 2012, *Building Resilience：Social Capital in Post-Disaster Recovery*, The University of Chicago Press.（=2015、石田祐・藤澤由和訳『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か――地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房。）

――――, 2019, *Black Wave: How Networks and Governance Shaped Japan's 3/11 Disasters,* The University of Chicago Press.（=2021、飯塚明子・石田祐訳『東日本大震災の教訓――復興におけるネットワークとガバナンスの意義』ミネルヴァ書房。）

アービター・ナヤ、ムレン・ロッド、小松原織香、坂上香、2020、「インタビュー

いつか来る春を待ちながら――受刑者の心の変化と『プリズン・サークル』」『世界』,930,134-144。

Alexander, Jeffrey C., (Eds.), 2004, *Cultural Trauma and Collective Identity,* University of California Press.

Arendt, Hannah, 1960, *Vita Activa: oder Vom tatigen Leben*, Kohlhammer, Stuttgart.（= 2015、森一郎訳『活動的生』みすず書房。）

蟻塚亮二・須藤康宏、2016、『3・11と心の災害――福島にみるストレス症候群』大月書店。

――――、2020、「闘うことは生きること――原発事故避難者のPTSD」『世界』,928,43-53。

安克昌、2001、『心の傷を癒すということ』角川学芸出版。

Australian Red Cross, 2018, *Review of the Literature on Best Practices Before, During and After Collective Trauma Events.*

Bateson, Gregory, 1972, *Steps to an Ecology of Mind: Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology*, Chandler Publishing Company.（=2000、佐藤良明訳『精神の生態学　改訂第2版』新思索社。）

Brady,K., Randrianarisoa,A. and Richardson,J., 2018, *Best Practice Guidelines: Supporting Communities Before, During and After Collective Trauma Events*, Carlton: Australian Red Cross.

Bourdieu,P., et al. translated by Priscilla Parkhurst Ferguson and others, 1999, *The Weight of the World: Social Suffering in Contemporary Society*, Stanford University Press.

Bourdieu, P., 1993, *La Misere du Monde,* Seuil. （= 2019、櫻本陽一・荒井文雄訳『世界の悲惨（全3分冊）』藤原書店。）

Bromet EJ, Havenaar JM, Guey LT., 2011, A 25year retrospective review of the psychological consequences of the Chernobyl accident. *Clinical Oncology* 23:297-305.

————, 2014, Emotional consequences of nuclear power plant disasters. *Health Physics* 106(2): 206–10.

Caruth, Cathy 1996, *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*, Johns Hopkins University Press.（=2005、下河辺美智子訳『トラウマ・歴史・物語』みすず書房。）

大門大朗・宮前良平・高原耕平、2020、「集合的トラウマと災害復興に関する理論的検討――カイ・エリクソン『Everything in its Path』を読み返す」『日本災害復興学会論文集』16, 37-46。

De Leon, George 2000, *The Therapeutic Community: Theory, Model, and Method*, Springer Publishing Company.

Eagle, Gillian and Kaminer, Debra, 2013, "Continuous Traumatic Stress: Expanding the Lexicon of Traumatic Stress", *Journal of Peace Psychology,* 19(2): 85-99.

Erikson, Kai T., 1976a, *Everything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood* , New York: A Touchstone Book.（= 2021、宮前良平・大門大朗・高原耕平訳『そこにすべてがあった――バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』夕書房。）

————, 1976b, "Disaster at Buffalo Creek. Loss of Communality at Buffalo Creek", *America Journal of Psychiatry*, 133(3): 302-5.

————, 1991, "Radiation`s Lingering Dread", *Bulletin of the Atomic Scientists*, 47(2): 34-39.

————, 1994, *A New Species of Trouble: The Human Experience of Modern Disasters*, W.W. Norton and Company.

————, 1995, "Notes on Trauma and Community", in *Trauma: Explorations in Memory* , Cathy Caruth ed., The Johns Hopkins University Press.（= 2000、権田建二訳「トラウマと共同体に関する覚書」下河辺美知子訳『トラウマへの探求――証言の不可能性と可能性』作品社、278-283。）

————, 1997, Prologue: Sociology as a Perspective, in *Sociological Visions,*

Rowman & Littlefield Publishers.:3-16.

————, 2017, *The Sociologist's Eye: Reflections on Social Life,* Yale University Press.

Freud, Sigmund, 1939, *Der Mann Moses und Die Monotheistische Religion*.（＝2020、中山元訳『モーセと一神教』光文社。）

Freudenburg, William R., 1997, "Contamination, Corrosion and the Social Order: An Overview", *Current Sociology*, 45(3): 19-39.

藤岡淳子編、2019、『治療共同体実践ガイド――トラウマティックな共同体から回復の共同体へ』金剛出版。

Havenaar, Johan M., Cwikel, Julie, Bromet, Evelyn, eds., 2002, *Toxic turmoil: Psychological and societal consequences of ecological disasters*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

———— , Rumyantzeva GM, van den Brink W, et al., 1997, Long-term mental health effects of the Chernobyl disaster: an epidemiologic survey in two former Soviet regions. *American Journal of Psychiatry*, 154: 1605–07.

Herman, Judith L., 1992, *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books,（＝1999、中井久夫訳『心的外傷と回復＜増補版＞』みすず書房。）

ハーマン , ジュディス（Judith Herman）、1999「トラウマ、家族、コミュニティー」、「こころのケアセンター」編『災害とトラウマ』みすず書房、133-146。

———— ,Kallivayalil, D., and Members of the Victims of Violence Program, 2018, *Group Trauma Treatment in Early Recovery：Promoting Safety and Self-care*, New York: Guilford Press.

疋田香澄、2018、『原発事故後の子ども保養支援――「避難」と「復興」とともに』人文書院。

Hirschberger, Gilad 2018, "Collective Trauma and the Social Construction of Meaning", *Frontiers in Psychology 9*.

ほようかんさい編、2021、『こんど、いつ会える？ 原発事故後の子どもたちと、関西の保養の 10 年』石風社。

Gergen, Kenneth J. , 2009, *Relational Being: Beyond Self and Community,* Oxford University Press.（=2020、鮫島輝美・東村知子訳『関係からはじまる――社会構成主義がひらく人間観』ナカニシヤ出版。）

Gergen, Kenneth J. and Gergen Mary, 2004, *Social Construction: Entering the Dialogue*. Ohio: Taos Institute Publications.（=2018、伊藤守監訳『現実はいつも対話から生まれる』ディスカヴァー・トゥエンティワン。）

池田香代子・貝沼博・児玉一八・清水修二・野口邦和・松本春野・安齋育郎・一ノ瀬正樹・大森真・越智小枝・小波秀雄・早野龍五・番場さち子・前田正治、2018、『しあわせになるための「福島差別」論』かもがわ出版。

石原孝二・斉藤環編、2022、『オープンダイアローグ――思想と哲学』東京大学出版会。

岩本通弥編著、2020、『方法としての＜語り＞――民俗学をこえて』ミネルヴァ書房。

金子勇、2011、「環境破壊から社会の復興再生へ――集団的ストレス状況の社会学的分析」『北海道大学文学研究科紀要』135：89-137。

兼子諭、2019、「トラウマの概念の社会学的応用とその意義――文化的トラウマ論の検討から」『社会学評論』69(4): 453-66。

――――、2021、『市民社会の文化社会学――アレクサンダー市民圏論の検討を中心に』晃洋書房。

Kardiner, Abram, 1947, *War Stress and Neurotic Illness (Second Edition),* New York: Paul B. Hoeber.（=2004、中井久夫・加藤寛共訳『戦争ストレスと神経症』みすず書房。）

Karenian, Hatsantour, Livadetis, Miltos, Karenian, Sirpouhi, Zafiriadis, Kyriakos, Bochtsou, Valentini, Xenitidis, Kiriakos, 2010, “Collective Trauma Transmission and Traumatic Reactions Among Descendants of Armenian Refugees”, *International Journal of Social Psychiatry,57(4):327-37*.

「こころのケアセンター」編、1999、『災害とトラウマ』みすず書房。

Kim Y, Tsutsumi A, Izutsu T, Kawamura N, Miyazaki T, Kikkawa T., 2011, Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb

explosion. *British Journal of Psychiatry*, 199:411-16.

木村真三、2014、『「放射能汚染地図」の今』講談社。

向後善之・久保田健司・大舞キリコ、2021、『マンガでやさしくわかるオープンダイアローグ』日本能率協会マネジメントセンター。

Kneer, Georg and Nassehi, Armin, 1993, Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme, Wilhelm Fink Verlag.（= 1995、舘野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン　社会システム理論』新泉社。）

Krieg, Anthea , 2009, “The Experience of Collective Trauma in Australian Indigenous Communities”, *Australasian Psychiatry, Vol.* 17,Supplement 1:S28-32.

Loganovsky Konstantin N. and Nataliliya A. Zdanevich, 2013, “Cerebral basis of posttraumatic stress disorder following the Chernobyl disaster”, *CNS Spectrums,* 18(2):95-102.

Levine, Peter A, 2015, *Trauma and Memory: Brain and Body in a Search for the Living Past*, North Atlantic Books.（= 2017、花丘ちぐさ訳『トラウマと記憶――脳・身体に刻まれた過去からの回復』春秋社。）

Lifton, Robert J, 1991, *Death in Life: Survivor of Hiroshima*, Random House.（= 2009、桝井迪夫，湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く――精神史的考察（上）（下）』岩波書店。）

Liu, Sze Yan, Lim, Sungwoo, 2020, “Collective Trauma and Mental Health Hospitalization Rates Among Children in New York State, 1999–2013: Age, Period, and Cohort Effects”, *Journal of Traumatic Stress* 33(35).

Luhmann, Niklas, 1991, *Soziologie des Risikos*, Walter de Gruyter.（= 2014、小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社。）

前田正治編著、2018、『福島原発事故がもたらしたもの――被災地のメンタルヘルスに何が起きているのか』誠信書房。

――――・松本和紀・八木淳子、2028、『東日本大震災とこころのケア――被災地支援 10 年の軌跡 こころの科学増刊』日本評論社。

Markowitz, John C., 2017, *Interpersonal Psychotherapy for Posttraumatic Stress Disorder*. Oxford University Press.（= 2020、水島広子監訳、中森拓也訳『PTSDのための対人関係療法』創元社。）

Micale, Mark S, and Lerner Paul, 2001, *Traumatic Pasts: History, Psychiatry and Trauma in The Modern Age, 1879-1930*. Cambridge University Press.（ = 2017、金吉晴訳『トラウマの過去――産業革命から第一次世界大戦まで』みすず書房。）

松浦直巳・八木淳子・福地成・桝屋二郎、2018、『被災地の子どものケア――東日本大震災のケースからみる支援の実際』中央法規。

水島広子、2009、『臨床家のための対人関係療法入門ガイド』創元社。

――――、2015、『トラウマの現実に向き合う――ジャッジメントを手放すということ』創元社。

宮地尚子、2011、『岩波ブックレット No.815 震災トラウマと復興ストレス』岩波書店。

――――、2013、『トラウマ』岩波書店。

――――、2018、『環状島＝トラウマの地政学（新装版）』みすず書房。

――――編、2021、『環状島へようこそ――トラウマのポリフォニー』日本評論社。

守山正樹、山本玲子、永幡浩司 , 2011「イメージの二次元展開による災害被災下での生活経験の振り返り――2011.3.11. 東日本大震災下での健康教育とヘルスプロモーションの可能性を探る試み」19 (3)：239-255

村上靖彦、2021、『ケアとは何か――看護・福祉で大事なこと』中公新書。

森茂起、2005、『トラウマの発見』講談社。

中井久夫、1999、「災害と日本人」、「こころのケアセンター」編『災害とトラウマ』みすず書房、173-192。

――――、2018、『中井久夫集 (7)1998-2002 災害と日本人』みすず書房。

――――、2019、『中井久夫集 (9)2005-2007 日本社会における外傷性ストレス』みすず書房。

中村英代、2022、『依存症と回復、そして資本主義――暴走する社会で＜希望のステッ

プ＞を踏み続ける』光文社新書。

直野章子、2011、『被ばくと補償――広島、長崎、そして福島』平凡社。

西研、2019、『哲学は対話する――プラトン、フッサールの＜共通了解をつくる方法＞』筑摩書房。

野口裕二、2018、『ナラティヴと共同性――自助グループ、当事者研究、オープンダイアローグ』青土社。

Ohta Y et al., 2000, “Psychological effect of the Nagasaki atomic Bombing survivors after half a century”, *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 54, 97-103.

O'Loughlin, Michael, 2009, “A Psychoanalytic Exploration of Collective Trauma Among Indigenous Australians and a Suggestion for Intervention”, *Australasian Psychiatry, Vol.*17,Supplement 1:S33-6

Parker G. 1977, “Cyclone Tracy and Darwin evacuees: On the restoration of the species”, *British Journal of Psychiatry*, 130, 548-555.

Picou Steven J., 1996, Toxins in the Environment, Damage to the Community: Sociology and the Toxic Tort, in *Witnessing for Sociology: Sociologists in Court,* Pamela J. Jenkins and Steve Kroll-Smith ed., Westport: Praeger, 211-224.

Picou Steven J., Brent K. Marshall and Duane A. Gill, 2004, “Disaster, Litigation and the Corrosive Community”, *Social Forces*, 82(4): 1493-1522.

Raphael, Beverley, 1986, *When Disaster Strikes: How individuals and Communities Cope with Catastrophe*. New York: Basic Books.（= 2016、石丸正訳『災害の襲うとき――カタストロフィの精神医学』みすず書房。）

Ron, Eyerman, 2015, *Is This America?: Katrina as Cultural Trauma*, Austin: University of Texas Press.

――――――, 2019, *Memory, Trauma, and Identity,* New Haven: Palgrave Macmillan.

斉藤環、2015、『オープンダイアローグとは何か』医学書院。

――― 2019、『オープンダイアローグがひらく精神医療』日本評論社。

坂上香、2012、『ライファーズ―― 罪に向きあう』みすず書房。

――― 2012、『プリズン・サークル』岩波書店。

サン＝テグジュペリ著、河野万里子訳、2006、『星の王子さま』新潮文庫。

Saul, Jack 2013, *Collective Trauma, Collective Healing: Promoting Community Resilience in the Aftermath of Disaster*, Routledge.

ヤーコ・セイッラク、トム・エリーク・アーンキル他、2016、『オープンダイアローグを実践する』日本評論社。

Shamai, Michal 2015, *Systemic Interventions for Collective and National Trauma: Theory, Practice and Evaluation*, Routledge.

島薗進、2019、『原発と放射線被ばくの科学と倫理』専修大学出版局。

Solnit, Rebecca, 2009, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*（＝2010、高月園子訳『災害ユートピア――なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房。）

下川辺美知子、2006、『トラウマの声を聞く――共同体の記憶と歴史の未来』みすず書房。

Speckhard, Anne C.,2005, “Information as a traumatic stressor: Psycho-social and physical outcomes of technological disaster” in Berkowitz Leonard, Berkowitz Norma, and Patrick Michael ed. *Chernobyl: The Event and its Aftermath,* Friends of Chernobyl Centers, United States (FOCCUS),201-229.

Sue, Derald Wing, 2010, *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*, John Wiley & Sons, Inc.（＝2021、マイクロアグレッション研究会訳『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション――人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』明石書房。）

成元哲・牛島佳代・松谷満・阪口祐介、2015、『終わらない被災の時間――原発事故が福島県中通りの親子に与える影響（ストレス）』石風社。

成元哲・牛島佳代・松谷満、2017、「原発不安に関する考察―― 福島県中通りの子育て中の母親の不安の諸相とその特質」『中京大学現代社会学部紀要』第 11 巻

第 2 号、71-98 頁

成元哲・牛島佳代、2020、「持続的なトラウマ――原発不安の変化と特質に関する研究」『中京大学現代社会学部紀要』第 14 巻第 2 号、79-112。

成元哲・牛島佳代・松谷満、2021、「原発事故 10 年、コロナ禍の福島の母たちの声―― 2021 年調査の自由回答欄にみる福島県中通り親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第 15 巻第 1 号、93-122。

髙橋若菜編・藤川賢・清水奈名子・関礼子・小池由佳、2022、『奪われたくらし――原発被害の検証と共感共苦（コンパッション）』日本経済評論社。

Takeuchi M, Kitamura T.,1991,“The factor structure of the General Health Questionnaire in a Japanese high school and university student sample”, *International Journal of Social Psychiatry*, 37, 99-106.

竹沢尚一郎、2022、『原発事故避難者はどう生きてきたか――被傷性の人類学』東信堂。

田中雅一・松嶋健編、2018、『トラウマ研究 1 トラウマを生きる』京都大学学術出版会。

――――――――、2019、『トラウマ研究 2 トラウマを共有する』京都大学学術出版会。

Tcholakian, Lara A., Khapova, Svetlana N., Van De Loo, Erik, Lehman, Roger 2019, “Collective Traumas and the Development of Leader Values: A Currently Omitted, but Increasingly Urgent, Research Area”, *Frontiers in Psychology*.10.

Thierry, Betsy de 2021, *The Simple Guide to Collective Trauma: What It is, How It Affects Us and How to Help*, Routledge. Jessica Kingsley Publishers.

戸田典樹編、2016、『福島原発事故漂流する自主避難者たち――実態調査からみた課題と社会的支援のあり方』明石書店。

Ushijima K et al., 2003, “Social Factors Associated with Psychological Distress among Inhabitants in a Methyl-Mercury Polluted area in Rural Japan”, *Environmental Sciences*, 11, 151-162.

牛島佳代・成元哲・向井良人・除本理史、2019、「福島から照射する水俣病をめぐる分断修復の現状と課題」『中京大学現代社会学部紀要』第 13 巻第 2 号、83-126。

Van der Kolk, Bessel. A, eds.,1986, *Psychological Trauma*, Washington, DC: American Psychiatric Press.（= 2004、飛鳥井望・前田正治・元村直靖訳『サイコロジカル・トラウマ』金剛出版。）

――――――――, 2015, *The Body Keeps the Score: Brain, Mind, and Body in the Healing of Trauma*, Penguin Books（= 2016、柴田裕之訳『身体はトラウマを記録する――脳・心・体のつながりと回復するための手法』紀伊國屋書店。）

Vyner, Henry.M., 1988, *Invisible trauma: The psychosocial effects of invisible environmental contaminants*. Lexington Books.

Wilkinson, Iain 2004, *Suffering: A Sociological Introduction*, London: Polity.

八木絵香、2019、『続・対話の場をデザインする――安全な社会をつくるために必要なこと』大阪大学出版会。

Young, Allan 1995, *The Harmony of Illusions: Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*, Princeton University Press（=2001、中井久夫・大月康義・下地明友・辰野剛・内藤あかね共訳『PTSD の医療人類学』みすず書房。）